国　　名　アルゼンチン，ブラジル
指導科目　歯科・補綴学
派遣先機関　ブエノスアイレス大学歯学部
　　サンパウロ大学医学部
専門家名　保　母　須弥也
赴任時現職　国際デンタルアカデミー所長
派遣期間　1983. 7. 26 ～ 8. 7

業務報告書

去る7月27日より8月4日までアルゼンチン国のブエノスアイレス大学歯学部とブラジル国サンパウロ大学歯学部において歯科咬合学に関する特別講演を行うために国際協力事業団より派遣されましたのでその経過をご報告いたします。

歯科咬合学は歯の噛み合せの学問で歯科でもきわめて新しい分野です。歯の噛み合せは，歯・顎の関節・筋・神経の協調作用によってなされるものでその仕組みは驚くほど巧妙かつ精巧です。噛み合せが悪いとその関連器官に障害を招き，まず，そのような病気の罹患者は成人の29～33%におよぶといわれていますが，今だに確実な治療法は発見されていません。その主たる理由は顎の動きの実体がつかめていないことにあります。私は過去10年間，東北歯科大学においてこの方面の研究を行い，特に人工衛星の姿勢制御に使われている測定原理を採用し，ヒトの顎の動きを40ミクロンの精度で3次元的に計測できる装置を開発し，多くの新知見を得ました。そのため顎の運動の実体は，おおむね解明し得たと自負しております。今回の講演の要請は，この点の解説とその臨床応用に関するもので，歯科界がまもなくムシ歯と歯槽漏を撲滅しようとしている背景もあり，将来の歯科治療のターゲットとしてこれらの国々でも咬合に対する関心が盛り上がっているようです。

時間の関係でブエノスアイレス大学では計16時間の講演になりましたが，大学教授，講師，助教授，大学院生，よくセレクトされた臨床家少数が参加しました。参加者は250名でありました。大学関係者はアルゼンチン国内は勿論，隣国のウルガイからも参集されていました。聴講者の知識レベルが高いため最初からかなり高いレベルの話をしましたが，よく理解してもらえたようです。日本の最新のエレクトロニクス技術を使った実験の報告では全参加者が驚嘆されたようで，今回の講演は私の人生で受けた最大のカルチャーショックであったといった感想をもらす方が大勢おられました。

日程の関係でブエノスアイレス到着後，24時間以内に講演を開始したわけですが，日本からアルゼンチンまで30時間を超える空の旅の直後であったため上手く講演できるか心配しました。また講演の内容に運動学，応用物理学など歯科とはなじみの少い学問が含まれているため添付のようなシルブスを作り持参しました。しかし，何分にも200頁を超えるボリューム

であったためコピーの製作が間に合わず，参加者には，後日，配布されることになるもようでした。しかし一部私の持参したコピーを入手されていた方々は講演の理解に非常に役立ったといってよろこばれているようでした。

サンパウロ大学では計２４時間の講演を行いましたわ，この場合も大学教授，助教授，講師ならびに大学院生のみに参加者が絞られているとのことで，サンパウロ州ならびにその近くの州の１０数校の歯科大学より代表が集っているとのことでした。

普通南米の学会における講演では，聴衆が一寸したジョークによく笑い楽天的なお国柄がかもし出されるものですが，今回は大学関係者が中心のせいか真剣そのものでかなり雰囲気が違うのに驚かされました。日系の教官も多数参加されていましたが，ブラジルの歯科は今まで米国，ヨーロッパ指向であったけれど日本の研究はさらに高いレベルにあるということが認識されたので同邦として鼻が高いといった言葉をもらされていました。

今回約２１００枚のスライドを持参しましたが，これらのスライドは講演の理解に充分に役立ったように思われます。１６～２４時間というのは聴く方にとっても非常に長い時間ですから，スライドが多いと気分も紛れまた英語からポルトガル語，スペイン語に逐語通訳される際のミスもカバーされ効果があったようです。しかし，何分にも枚数が多いため講演前にトレーへスライドをセットするのに２時間，講演後トレーからスライドをファイルへ収納するのに２時間近くを要し毎日の日程の中でこれがかなりの大仕事になりました。特にアルゼンチンからブラジルと２国をまわる関係上スライドをきちっと収納しておかないと後日に混乱を招きますのでこの点には充分に気を使いました。尚，東京からの連絡でスライドトレーは，前以てホテルへ届いておりましたので，限られた時間内で準備をする関係上，大変に助かりました。

アルゼンチン，ブラジル両国とも欧米の有名歯科教授を大勢招いて講演を聴いているため，最先端の知識に精通しているようでした。そのため欧米の研究の受売りをするようなレクチャーでは，到底満足してもらえないと思います。幸い私の講演はすべてオリジナルリサーチによるものであるため，それなりの感銘を与えることができたようです。特にエレクトロニクス，コンピュータ関係の知識は両国とも皆無に等しく，この方面の技術の歯科的利用は，我が国が最先端を行きつつある関係上，今後，これらの国々で技術指導をする場合には，この分野がクローズアップされるべきだと感じました。今回大学病院を詳しく見学する機会には恵まれませんでしたが，実際の臨床における技術レベルはあまり高いようには思われませんでした。歯科は頭で理解したことを手で表現しなければならない学問ですから将来は実習を伴った専門家の指導が喜ばれるのではないかと感じました。

最後に出発準備にあたり細くお心使い頂きました東京ＪＩＣＡの浅田京子様，ブエノスアイレス到着の際，早朝にもかかわらずお出迎え下さり終始お世話下さったＪＩＣＡアルゼンチンの河井氏に深く感謝申し上げます。

業　務　日　誌

月　日	曜　日	内　　容
7.26	火	15：55　東京発途中ロスアンジェルスで飛行機を乗りつぎ一路アルゼンチンへ
7.27	水	6：30　ブエノスアイレス着　JICAの河井氏の出迎えを受ける。 税関はフリーパスでただちに宿舎のクヂオンホテルへ向う。 休憩後河井氏の案内でJICAを訪問斉藤正次ブエノスアイレス支部長に到着のごあいさつをした後，日本大使館に出向き大島弘輔公使，小澤祐享一等書記官にお目に掛かる。 夜は斉藤正次支部長のご案内で市内のスペイン料理屋で夕食をごちそうになる。
7.28	木	8：00より16：00までブエノスアイレス大学歯学部の講堂で講演出席者約250名 夜：ブエノスアイレス大学のマダレーナ教授，マックハナフォード準教授各ご夫妻のご招待で市内の中華料理店で夕食つづいてナイトクラブでタンゴショーを楽しむ
7.29	金	8：00より16：00までブエノスアイレス大学にて講演 講演終了後同大学より感謝状と記念品としてアルゼンチンの写真集を頂く。 夜：Lois H. Braverman 助教授の別荘（ホテルより車で約40分）でアルゼンチン式のバーベキューを楽しむ。トリオのエンタテーナーも入り大変な歓待を受ける。出席者約35名
7.30	土	午前中に荷作りを終えマダレーナ教授のお見送りで15：00ブエノスアイレス発　17：20サンパウロ着。 日本領事館ならびにサンパウロ大学の関係者多数のお出迎えを受ける。 税関はフリーパスでただちに宿舎のヒルトンホテルへ向う。休憩後，玉置正サンパウロ大学歯学部副学部長，レナード・トデスカン補綴学教授らのご案内で，日本人街のレストランで日本食をごちそうになる。
7.31	日	一日ホテルで講演用スライドの整理を行う。 夜：玉置，トデスカン教授らと夕食。
8.1	月	8：00より12：00までサンパウロ大学キャンパス内の国際会議場で講演。休憩後，18：00より22：00まで講演。出席者150名 夜：玉置，トデスカン教授らと大学の近くのステーキハウスで夕食。
8.2	火	前日と同じスケジュールで2日目の講演を行う。

月　日	曜　日	内　　容
8.　2	火	午前中の講演後サンパウロ大学のデオラシー学部長のご招待で市内の海鮮料理店で昼食をごちそうになる。 夜：玉置，トデスカン教授らと市内の日本料理店で鉄板焼の夕食を頂く。
8.　3	水	午前中，講演用スライドの整理 １４：００より２２：００まで講演，途中，１８：００より１８：３０まで休憩　その間にサンパウロ新聞，パウリスタ新聞，Imagens do Japao Canal II　テレビのインタビューを受ける。 講演終了後，ブラジル政府よりMERITO・INTEGRACAO・・NACIONAL　勲章と勲記を受ける。 夜：トデスカン教授宅で，学部長はじめ大学の関係者を中心にディナーパーティー。出席者約２０名
8.　4	木	１０：００より玉置副学部長のご案内でサンパウロ大学を見学，歯学部の関係者と講演内容についてディスカッション行う。２１：２０サンパウロ発。
8.　5	金	７：３０ニューヨーク着，飛行機乗りつぎのため市内のレキシントンホテル泊
8.　6	土	１３：３０　ニューヨーク発
8.　7	日	１６：１０　東京着

国　　名　ボリヴィア
指導科目　病理学
派遣先機関　ボリヴィア病理学会
専門家名　喜納　勇
赴任時現職　浜松医科大学病理学第一講座教授
派遣期間　昭和５８年１１月１１日～同年１１月２２日

業務報告書

1. 講演　題目　第一部　胃生検組織診断について
　　第二部　胃癌組織分類について

第一部は，胃癌の診断に類することのできない胃生検の組織診断（病理診断）の実際について説明した。特に最近本邦にて改訂された胃生検組織分類（group分類）についてその概要を説明した。

第二部は，ＷＨＯの胃腫瘍の組織分類について，筆者が直接関係したこともあって，その長所と短所をも含めて説明した。又本邦の胃癌研究会で設定した胃癌組織分類とも比較し，同者の同一である点と相違する点をうきぼりにし，ＷＨＯの胃腫瘍組織分類が将来改正すべき点を強調した。

Bolvia 病理学会出席者は全体で１００～１５０人と推定されるが，筆者の講演には７０人前後の出席であった。極めて出席者は熱心であり，今回の病理学会の中で最も興味ある演題であったと後程筆者に告げた人もいた。

2. 専門書籍は英文であることが要求されるため，英米系の著者の専門書を注文したが時期的に間にあわないため１２月以降に Bolivia 病理学会に寄贈されるはずである。（３０万円相当）

例えば，Lapazのサンアンドレス大学医学部のmajor affiliation（本邦でいう附属病院）であるGeneral Hospital における専門家の欠乏は目に余るものがある。当地病理医の要求は，subspeciality である（病理一般のものは「個人で」所明している由），従って，消化管病理学・心臓病理学・筋肉の病理学等といったような専門書を少くてもBolivia病理学会では，求めているようである。次回著し Bolivia 国に病理学者が行く機会があったらＪＩＣＡから該当者にその旨「明瞭に」要求すべきであろう。

3. Bolevia 国の病理学の水準について

学会発表の場のみから推測するに，彼らは極めて新しい知識を得たがっているようである。しかしそれはあくまで「実用に役立つ」ことが前提である。実用と直接関係ない研究（本邦ではしばし賞讃される）にはあまり興味を示さない。（例えば，胃癌の実験的発生）

病理診断は医療の基礎であるので，研究発表も，主として癌の実体（病理診断をもとにし

た）と感染症の実体を主としたものが多かった。

このことから，この国の治療の主眼とすべきは，悪性腫瘍と感染症の二つの柱を考えるべきであろう。

前者については早期発見ができるよう，医療体制をととのえる必要があろう。

後者については感染症を克服するためには，かなり社会医学的見地からの対策が必要で患者をat randamに病院につれてきて薬を与えるというようなことでは根本的な解決にはなるまい。Boliviaの下層階級には，結核，赤痢・アメーバ赤痢が多いとされているが，これは診断，投薬だけの問題ではあるまい。WHOが天然痘を撲滅したような地道な活動が必要なのではあるまいか。

新しい超近代医療器具をそろえた病院は，それが努力によって達せられるとわかれば適当な刺戟にはなろうが，しばしば逆に周囲の医師から反目をあびるだけでは，何のための医療援助かわからなくなる。最近医療器具1つよりは，平均の医療器具多数の方が役に立つのではなかろうか。

業　務　日　誌

月　日	曜　日	内　容
11. 11	金	CP402にて19：30成田発。 Van courver 着，11：00 接続時間長いため，空港ホテル（Skyline Airport Hotel）にて休息。非常に快適なり。 CP24にて19：30（18：00がおくれて）出発。
11. 12	土	Lima着。8：00（6：30がおくれて） 接続時間少ないため空港で待機するも，はなはだタイクツなり。 LB917にて13：00 Lima 発。 Lapaz 着。15：35 JICA浅野氏及びボリビア病理学会の会計幹事Dr. Coneonの出迎えをうける。市内Sheraton Hotel に入り，そのまま休息。
11. 13	日	一日休息。高度になれるのに時間がかかる。幸い頭痛は軽度。食欲はあまりない。時に散歩を交え，持参したスライド整理と講演の準備にとりかかる。 夜は，Dr. Carrein宅にて病理学会幹部とカクテルパーティー。
11. 14	月	午前中は講演の準備

月　日	曜　日	内　　容
		１２時Dr. Carrein の車にて四千米の高原を約４時間でOrulo 迄走る。Orulo の Terminal Hotelに入る。
		夕方より病理学会開会式。ひきつづきカクテルパーティー。
11. 15	火	Terminal Hotelの二会場を使用して，病理学会第一日始まる。
		Spain語はよくわからぬが，なれる意味もあって一日出席。
		夜，Orulo市長招待カクテルパーティー。Orulo市長より賞状をいただく。
11. 16	水	午前１０時～１１時半　第一回講演。
		胃生検組織診断について。
		１１時半～１時半　スズの製練工場見学
		午後３時半～５時半　第二回講演
		胃癌組織分類について。
		夜，病理学会懇親会
11. 17	木	午前の一般講演に出席した後，１１時 Orulo発。
		JaxiにてLapazにもどる。
		午後３時再びSheraton Hotel に入る。
		直ちにＪＩＣＡ浅野氏の案内で，ＪＩＣＡ－Bolivia Gastrointestineil Institute を見学する。
		Dr. Villa－Gomez 所長とも歓談する。
11. 18	金	午前中，Lapaz General Hospital 病理部と，General Hosp.をaffiltiateしているサンアンドレス大学医学部を見学する。その設備の貧弱なことにびっくりする。
		午後，休養。
		夜，Dr. Cariean 宅にて食事をしつつBolivia病理学会の今後のことを打合せる。１９８５年 Sucreでの次の病理学会の出席を要請される。
11. 19	土	ＬＢ－９１８にて１１：００　Lapaz 発。
		浅野氏の見送りを受ける。
		Lima 着。１２：００　そのまま市内Crillon Hotelに入り休養。
11. 20	日	ＬＡ－１４０にて，００：４５深夜Lima 発。New York 着。10：10
		そのまま市内Lexington Hotel に入り休養。
11. 21	月	ＪＬ－００５にて１２：３０　New York 発。
11. 22	火	東京成田空港着　１６：１０

国　　名　ボリヴィア
指導科目　1. 病理学
　　2. 消化器内科学
派遣先機関　ボリヴィア癌学会
専門家名　1. 田中　昇
　　2. 細井董三
赴任時現職　1. 千葉県がんセンター研究所研究局長
　　2. 東京都がん検診センター消化器科医長
派遣期間　昭和58年11月19日～同年12月1日

業務報告書

1. Bolivia癌学会　特別講演

演題　1. 悪性リンパ腫の新分類
　　2. 子宮頸癌の病理

- 参加人員は約300名
- Tarija 大学，及び医学部の講演。教室で実施された。
  本来はSanta Cruz で癌学会長 Dr. Nreyのもとで開催されるべきであったが，水害の被害が大きく，政情が比較的安定しているTarija に選んだとのこと。
- 参会者は各地から参集。外国からの招待は我々と2人のJICA Sponsorship の他，Dr. Senth から老大家Dr. Lagrutta（婦人科）
- 参加者のレベルは各部門分野に分かれるために各分野ではBrazil，Argentine，Chili，Amerciaの他，日本で勉強した者であるが，一般には低いように思われた。
- 英語が話せ，理解出来ることが昇進の第一条件のようだ。特に処偶されている様子。我々を迎えてくれた副会長は英語が出来る数少い学者である。通訳をしてくれたDr. Sanchez は米国で12年間勉強した者で，重要視されている。多数の質問に極めて適切に通訳してくれた。

2. 胃癌対策について

細井博士からも報告があるかと思うが，日本もなるべく近い将来，早期発見方策として取り入れるべきである内視鏡を第一次スクリーニング方式とすること。

(1) 現行のX－線第一次スクリーニングに化して発見率が著しく高いこと。
(2) 経費的に1／5～1／10ですむ。X線装置の高価，消耗，更新，X－フィルムの高価と較べると内視鏡を第一次スクリーニング方式として採諾すべきことを終始強調してきた。
(3) X－線と同様，内視鏡所定の読影の高度の研修の必要性を痛感。－従来のX－線読影研修を改革する必要がある。

(4) ボリビア人の胃の形態がX－線で早期癌が発見しにくい。

3. その他の癌対策について

疾患の疫学調査が殆んど行われておらず，調査の結果も保存されていない。

集団検診をするにも手のほどこしようもない状態の中で，最も頻度の高い癌の１つであると思われる子宮癌の細胞診の成績が学会で発表されていた。

細胞診技師，専門医の養成は世界で第一位の日本として是非とも協力してあげたい分野の１つである。

4. ＪＩＣＡ協力援助で設立されたＣＩ Center：日本でもあまり見られないような良く整備されているLapaz，とCochabambaを見学した。前回見学の時より，一度整備されていた（Sucreは見なかった）内視鏡など旧式の装置，更新を要する資材の整備が今後の課題である。

過去某大学一辺倒で続けて来た指導態勢に対して，先般Boliviaに派遣された筑波大，中村恭一教授（小生の後輩），西沢護博士，同所の細井博士も又，吉水大使も大変批評的でした。更に拡大した幾つかの○門施設で十分協議し，隔差の無いように受け入れ，派遣をすべきであった。この件については１９８１年の時同行した竹内山梨副部長も同じ見解を有しておられた。

5. Cochabamba paramedical教育施設（短大レベル）

１９８１年私が視察した時は建築途中で，所長に歯科衛生士カリキュラムを作ることが，近隣の大学医学部との関連で有効であり，かつ避地にも有効であると提言してきた。放射線技師コースは既に閉鎖されていた。X－線がそれ程全国に普及していないので，技師の要請がそれ程，多くないのは予め判っていたはず。

6. 吉水大使の言。

先般Cochabamba GI Centerを訪問した際に，表面に日本－ボリビア協力の看板がない点に不備を持っておられた。当GI Centerを訪れた際，正面横，又玄関の横にパネルが壁にはられていたが，一般には気がつかないとのこと。早速所長Dr. Saravia その他のスタッフに伝えておいた。恐らく設計者がデザインの上で入れなかったのだろうとのこと。

幸い，Lapazのホテルで日本設計（CI Centerの設計担当者）の２人に会ったので，その件を伝えた所，それ程金のかかることではないので善処するといっていたので，その結果を見守ってほしい（三井ビル５０Ｆ岡野正人氏，箱山好徳氏）

7. 今後の課題

消化器，小児といったsubspecialityよりは総合病院を援助，充実し，その中で専門家を育てて行くほうが効果的であるような印象で，従来，研修されて来た現地送師の能力と，派遣専門家の指導能力のバランスについて検討を要する。

今後は総合病院の方針で援助協力が望ましいと思われる。特に現地の大衆のレベルを考える場合に，養成された現地医師が指導者の立場を発揮すべきで，もっと進出して行くべきで

ある。

今回の癌学会にＪＩＣＡ協力で研修された現地医師の出席状況が極めて悪いのは遺感である。（２名だけ）もっと指導的な立場をとるべきであろう。あるいはそのレベルに達していないのか？

業　務　日　誌

月　日	曜　日	内　　容
11. 19	土	１７：２０　ＮＷ０１８にて成田発 １５：３０　ＮＹ（ＪＦＫ空港着） ２０：３０　ＮＹ発　Lan Chili １４１
11. 20	日	Miami 経由　　０６：３０　Lima 着 １３：３０発　LLOYD　Bolivia ６０３ １５：３０ Lapaz 着　ＪＩＣＡ川添氏出迎え。 Bolivia はゼネスト，航空，交通，電信，テレックスなど総てが途絶状態の中で，我々のトランクが未着。 川添氏が懸命に捜索手続きをしてくれたが全く音信不通で打つ手なし。
11. 21	月	前日同様ゼネスト，全交通機関，タクシー，バス，航空便欠航，銀行，商店総て閉扉 ０９：３０　我々を出迎えにTarija から来てくれていたBolivia癌学会副会長Dr. Robertson を含め，川添氏，浅野氏，我々２人と打合せ。 １０：３０　大使表敬訪問。後藤書記官，川添氏同席。Gl Center JICA協力の過去，現状，将来について１時間以上懇談。私は２度目の訪問で，大変打ちとけて内部，細部にわたって話し合えた。（この時は来年３月で帰国する予定と話されていたが，私共帰国直前に急に帰国となった由） １１：３０　Bolivia, Latin America病理学会長Dr. Rioz Daleng宅にDr. Robertson と同行。彼は私の友人で，１９８１年に私を同病理学会総会に特別講演者として招待した人で，現在肝炎で療養中。Dr. Robertson に学会運営について色々指示し，細部の打合せ。 ２０：００　Dr. Hofman-Banz 宅に招待。本人はスペイン滞在中。夫人，家族の歓迎をうけ，特に我々は出発来３日間，着のみ着のままで，Hofman のパジャマ，ワイシャツなどを貸してくれたのが何より助か

月　日	曜　日	内　　容
		った。
11. 22	火	前日来のゼネストでTarija行の臨時便が出るとの情報で，05：00ホテル発で空港に行ったが06：00発予定が延期になり，我々の航空券の時間が違うなどトラブルがあったが，癌学会副会長Dr. Robertsonの交渉で彼と共に07：40分発に乗れたが，Cochabamba 08：20着，のりかえ11：00発で11：45やっとTarija にたどりついた。Hotel Victoriaに入った。 17：00　大学の講堂で，癌学会開会式。私を「ひな段」に招待されたが「着のみ着のまま」で若干気がひけた。 引続き，Tarija 市庁広間で，Tarija市長の招待カクテルパーティー。それに先立って，我々を正面席にすえて，市長から感謝状が贈呈される。
11. 23	水	09：00　Congress 開始。大学医学部の講堂，教室を3ケ所に分け開催。 09：30　Tarija 大学テレビインタビュー（Boliviaで最も進歩したカラーTV局との由）　ニュースで放映されたのを見たが大変よく出来ていた。帰る際にdupをもらいに行ったが，経済的な理由で次の用途に用いるため消去してしまって無く，残念であった。 10：30　Tarija 全市停電。学会継続不能の為中断。回復見通し立たず。 17：30　スライドを用いてのプログラム―対がん協会の癌対策討論。Round Table Discussion。我々も司会者席にすえられ，討論に参加。（通訳　Dr. Sarchez） 18：30　電灯がついたので，直ちに前のsessionの残りとを消化。 19：00～20：00　田中特別講演「子宮癌の病理学」通訳　Dr. Sarchey。 20：20～22：00　残りのプログラムを消化 22：00～23：30　招待宴に参加
11. 24	木	09：00 Congress 開始 11：30～12：30　田中特別講演「New Classification of malignant Lynphoma」(悪性リンパ腫の新分類) 13：00～15：00　Congressの打合せ。日―ボ癌協会に対する報告を聞くことをかねて返礼の昼食会―出席者9名（別報）

月　日	曜　日	内　　容
		本癌学会に期待されているArgentinの Dr. Lagruttaが同席。席上，ＪＩＣＡのBoliviaに対する医療協力に対する一方○○な感謝が述べられ，今後の援助について要請があった。 ＪＩＣＡに伝達することを約束した。 １５：３０　副会長Dr. Robertson の病院・病理研究所を見学した。貧しいの一語につきる。我々の終戦直後の状態である。 １７：００　対癌協会婦人グループの茶会に招待され，ＪＩＣＡの今までの協力に感謝が表明され，今後の援助，特にTarija に計画されている病院に対する支援が要請された。 １９：００～２０：００　子宮頸癌対策のPanel 討論。 田中はPanelist として参加。日本の細胞診を中心とした方式によって子宮癌の早期発見，死亡率減少に成功していることを紹介 ２０：００　本癌学会会長Dr. Galarza 宅に学会幹部数名。Dr. Lagrutta（Argentin ）と共に招待された。
11. 25	金	０９：００　学会開始。一般演題 １０：３０～１１：３０　Dr. Lagrutta 特別講演「悪性絨毛上皮腫」一般演題に引き続き １２：００～１３：１０　Dr. 細井特別講演「胃癌診断の方法論」 １５：００～１７：００　消化器癌の疫学，診断，手法等に関するRound Table Discussion，田中，細井はParnelist として参加。 ２０：００　閉会。お別れ会。翌朝２時にホテルに帰った。タクシーも無く，送ってもらう以外に方法が無く，逃げられず，翌朝ホテルの朝食で朝６時に帰って来た人が多かった。
11. 26	土	午前，ＴＶ局を訪問。インタビューの録画をさがしてもらったが見つからず，恐らく消去されてしまったとのこと。 １３：３０の予定が１時間おくれ１４：３０Tarija発 Cochabamba 着１６：００　ＪＩＣＡ朝倉看護婦，小林隊員，GI Center Dr. Zabare 出迎え
11. 27	日	１０：００　Dr. Zabare，朝倉看護婦の案内で我々を待っていてくれた院長代行Dr. Saraviaと懇談。内部を見学。十分に意見交換。 １６：２０　発ＬＢ８０６で１６：５０　Lapaz 着
11. 28	月	大使の昼食会招待予定の所，大使が急拠帰国のため中止

月　日	曜　日	内　　容
		元日本人会長井門氏の案内で主要個所を見学。。 GI Center を訪れ，明日予定のGI Center での特別講演の打合せ 夜２０：００　GI Center Dr. Orachea 宅に招待。GI Centerの幹部が同席。
11. 29	火	１０：３０　GI Center Lapaz に １１：００～１３：００　特別講演　田中，細井　癌学会の講演を再現との求めに応じた。 川添ＪＩＣＡ所長の招待で昼食 １６：００　空港へ １８：００発ＬＢ９０８でSanta Cruz へ　１８：５０着　３時間待ち，２３：００発　Panama City ー０７：００　Miami ーChicago １１：１０発　ＮＷ００３
11 30	水	
12. 1	木	１６：００　成田着 （田中　昇）

月　日	曜　日	内　　容
11. 19	土	17：00　NW018便で成田空港発 15：30　ニューヨーク，ケネディ空港着 20：50　LA141便にて同空港発
11. 20	日	6：20　リマ空港着 リマ市内見学 13：00　LB917便にてリマ空港発 15：35　ラ・パス空港着 空港でJICA事務所長・川添氏の出迎えを受け，ホテル・シェラトンに直行。
11. 21	月	LB603便でタリハに向う予定であったが，ゼネラル・ゼネストで交通機関は完全にストップ。全便欠航のため，ラ・パスで足止めされる。そこで午前中はJICA事務所と大使館に挨拶に行き，午後は市内見学の後，GIセンター所長のホフマン氏宅を訪問した。JICA事務所では，今回の癌学会の副会長であるロバートソン教授に会い，学会のプログラムの打合せなどを行った。大使館でな吉水大使とボリビアのGIセンターのあり方，運営，指導方針等について意見を交換した。
11. 22	火	タリハ行きの不定期便があるという情報が入ったので，5：00ホテルを出発，6：00ラ・パス空港着，空港で待機し，7：40発コチャバンバ行きの不定期に乗り，コチャバンバ発11：00の便で，11：45タリハ空港に到着，学会関係者の歓迎をうけた。 18：00　ボリヴィア癌学会の開会式が行われ，20：00　市庁舎に於てタリハ市長による，我々特別講演者に対する表彰式が開かれた。その後，懇親会としてカクテルパーティーが催された。
11. 23	水	9：00　学会第1日目始まる。会場は大学の医学部の収容人員200人ほどの教室で，演壇は勿論のこと，演者用のライトもなく，あまりにも粗末な会場でびっくりさせられた。 10：30　突然，停電となり，学会は中断され，そのままなす手もなく，6時間以上会場に座って送電を待った。 17：00　停電のための臨時プログラムとして，Anti Cancer SocietyのLadys group のメンバーも加わって，ボリヴィアにおける癌対策についてのDiscussion が開かれ，我々も意見を求められた。 18：30　送電が開始されたので，学会は再開された。

月　日	曜日	内　容
		１９：００　約１時間にわたって，Dr．TANAKAによる特別講演「Pathology of Uterine Cancer」が行われ，好評を博した。聴衆は約２００名。
		２０：３０　町はずれのレストランで招待宴が開かれた。
11．24	木	９：００　学会第２日目開始
		１１：００～１２：３０　Dr．TANAKAによる特別講演「New classification of malignant lyrphoma」が行われた。聴衆は約２００名
		１３：００～１５：００　ホテル・ヴィクトリアに於て，学会の打合せを兼ねて，学会幹部６名とアルゼンチンからの講師Dr．LA GRUTTAを我々が招待して昼食会を開いた。その席でボリヴィア癌学会会長のDr．UREYからボリヴィアに於ける癌対策の実情の説明と，GIセンターの日本政府のProjectに対する謝辞が述べられ，今後の援助の継続と協力の要望があった。
		１５：００　ロバートソン教授の病理学研究室を視察
		１９：００　Uterine CancerのPannel Discussionに参加。
		２０：３０　学会長宅の夕食会に学会幹部と共に招待された。
11．25	金	９：００　胃癌の診断と治療に関する一般演題の発表が行われた。
		１０：３０～１１：３０　Dr．LA GRUTTAの特別講演の後，１２：００～１３：３０　小生の特別講演「Diagnostic melhodology for cushic cancer」Dr．SANCHEZの通訳で行われた。聴衆約２００名。
		１５：００～１７：００　Pannel Discussionに参加
		消化器癌の疫学，診断，治療をめぐって盛んなDiscussionが行われた。
		１８：００～　Farewell Party
11．26	土	午前中はＴＶ局を訪問し，癌学会の録画を見学。
		１４：３０　学会長，副会長等の見送りを受けて，タリハ空港を発つ。
		１６：００　コチャバンバ空港着
		空港ではＪＩＣＡ看護婦の朝倉さんと協力隊員の小林氏およびコチャバンバGIセンター医師のDr．ZABALAの出迎えを受けた。その夜はホテル・コチャバンバに泊る。
11．27	日	１０：００　Dr．ZABALA，朝倉看護婦さん，協力隊員小林氏の案内

月　日	曜　日	内　　容
		でコチャバンバGI センターを視察。 所長代理のDr. SALAVI A を混えて，GI センターの現状と問題点について話し合った。そこでは，とくに日本から派遣される指導医の質が問題になり，一大学（現在は東邦大学）だけで賄おうとするのは人材の面から無理があるのではないかと感じた。 16：20　LB806便にてコチャバンバを出発 16：50　同便にて，ラ・パス着。ホテル・シェラトン泊。
11. 28	月	10：00～15：00　前ラ・パス日本人会会長の井門さんの案内でチワナク遺跡を見学。 20：00～23：00　ラ・パスGI センターのDr. OLAECHEA宅の夕食会に招待され，GI センターのDocter 数人と会食した。そこでは癌検診のあり方等について意見を交換した。
11. 29	火	11：00～14：00　ラ・パスGI センターを視察。そこでタリハの癌学会で行ったのと同じ演題の講演を依頼されたので，Dr. TANAKAは「New classification of malignant lyhphome」を，そして小生は「Diagnostic methodology for gastric cancer」をそれぞれ約1時間ずつ講演した。 15：00　JICA事務所に別れの挨拶に行く。 18：00　LB908便にてラ・パス空港を出発。
11. 30	水	機内で過す。
12. 1	木	16：00　NW003便にて成田空港着。

（細井　董三）

国　　名　ブラジル
指導科目　成人病学
派遣先機関　リオ・グランデ・ドスール・カソリック大学
専門家名　五島　雄一郎
赴任時現職　東海大学付属病院長
派遣期間　1983. 7. 16 ～ 7. 25

業務報告書

午後8時よりイタリアPavia大学 Gerontology De Nicola教授の講義について約1時間講義した。（英語にて，Dr. Santos通訳付）大学院学生及び医師約60名出席。

日本人の寿命の延長，死亡率の変遷，何故脳卒中が減ったか，心筋梗塞の現状，過去20年間の日本人の血清コレステロールの変動及びその背景因子である食生活の変遷，動脈硬化の予防因子であるHDLコレステロールが日本人において欧米人よりも高い理由が環境的因子によること。動脈硬化の危険因子である高血圧，喫煙，高脂質血症，肥満，糖尿病等食事に由来する因子が多いことから食生活における悪い習慣を除く必要があることから例を日本の相撲及びナウル島をあげて説明した。5～6人より質問があり，10時過ぎ終了。

7月20日

午前9時半Catholic Univ. 着。講義の打合せを1時間行う。

講義は夜8時より前日と同じ講堂にて，高血圧の話を行う。即ち食事療法として食塩制限，体重の減少の必要性が第一であること。次いで薬物療法につき降圧剤の種類分類，副作用，老人への使い方，降圧剤の脂質代謝に及ぼす影響などについて講義した。質問者多数，関心の重さが分る。昨日と同様約60人出席。熱心にノートをとっていた。午後10時半終了。

7月21日　午前9時半　Catholic Univ. 着。

10時より夜の講義の打合せをスライドにて通訳Dr. Santos と1時間半行う。

講義は夜8時50分より，昨日の講義について3～4人から質問があり次いで不飽和脂胞酸及び過酸化脂質について行う。植物油及び魚油が動脈硬化性疾患の予防に有効であることを述べ，アメリカ，ヘルシンキにおける食事実験の疫学的研究からリノール酸の多い食事が冠動脈疾患の発生に有効であった事実を解説した。次いで魚油に含まれるEicosapentaenoic Acid（EPA）の効果について血中脂質代謝及び血小板に対する効果を述べた。

これらの受価不飽和脂胞酸は，動脈硬化の予防・治療に有効であるが，これらの植物油・魚油及びその加工品の保存が悪いと危険な過酸化脂質が発生し，これが老化をはじめ，動脈硬化その他数多くの疾患の発生のもとになることを述べ，ビタミンE，B2，パンテチン等がこれを

阻止する動きのあることを述べた。

過酸化脂質については全く新しいことであった為，数多くの質問が集中し，終了したのが11時過ぎになった。

ブラジルの食事は肉食が多く，脂肪過多の為に，本日の話には関心が特に集った。しかし過酸化脂質の測定ができない為，早速測定機械を日本から入手したいという希望が老人病研究所員の中からだされた。

7月22日　午前10時よりDr. Santos と講義のリハーサル及び打合せを行う。

講義は本日私一人（De Nicola 教授の講義は昨日で終了）午後8時より動脈硬化の食事療法並びに老人の食事について10時20分まで講義した。

4日間の講義のあと，何人かの若い医師に印象をきいたところ，今迄聞いたことがなかった新しいことを沢山きくことができて大変よかったこと，日本と比べてブラジルは国が大きすぎていろいろな統計が全くないことが残念であるとか，野菜が高く肉が安い為に肉食中心の食生活になり，中々食生活を変えられないこと，更には数人の若い医師が是非日本へ行ってアポ蛋白の測定や過酸化脂質の測定を学んでブラジルで応用したい，といった意見をもっていた。

森口教授からもお世辞でなく，大変立派で有益な講義であって，日本人として大変誇り高く感じたという話を最後にされ，今回の講義にはブラジル全土から代表の医師が集ってきており，ブラジル医師を代表してお礼を述べたいという謝辞があった。尚カトリック大学よりvisiting professor の号をいただいた文書を授与された。

尚，森口教授より今春日本医学会出席の為日本を訪問した所，先年来られた折茂，上田両氏より，大へん講義のスケジュールが一ぱいで大変疲れた，あのようなスケジュールでは今後誰もブラジルには行かないだろうといわれ，今回は夜だけの講義を私に御願いしたいということであった。同時にイタリアからこられたDe Nicola 教授は午前中と夜の2回講義を5日間行われていた。

全般的にブラジルの医学レベルはかなり低く，とくに研究をするという段階ではない。日本に留学した5～6人の医師達と会って話す機会があったが，いずれもカトリック大学老人研究所の中心医師となっていたが，政府の援助がなく，老人病研究所が独立採算でやっていることが大へん困難であることを森口教授からきいた。

森口教授ただ一人でこれまで老人病研究所を大きくしてこられた努力は大変だったことと思われ，今後できる限り日本から援助をしてあげたいという気持を大きくもった次第である。

業　務　日　誌

月　日	曜　日	内　　容
7. 16	土	JAL062　PM5：20成田発　約50分遅れて出発。 同日正午　Los Angeles 着。同地一泊
7. 17	日	PA441　PM12：30　Los Angeles 発。 PM8：40　Maiami 着。 PM10：00　Maiami 発。
7. 18	月	午前7時5分定刻　Rio De Janeiro 着。 領事館の梶田氏出迎え通関に便宜をはかってくれた。 同TR501　AM11：20　Rio De Janeiro発 同15：05　Porto Alegre着（30分延着） 森口教授の出迎えを受け，Plaza Hotelに投宿。翌日からの打合せを行って休息。
7. 19	火	午前9時半，カトリック大学へ。森口教授を訪問。同10時，総領事館に新村総領事を表敬訪問。次いで11時カトリック大学副学長LIBERATO 教授（学長は不快の為不在）を表敬訪問。 12時イタリアPAVIA大学老人科教授DIETRO　DE　NICOLA教授及びカトリック大学老人病研究所サントス助教授らと会食。午後休息。 午後6時半カトリック大学訪問。DE　NICOLA教授らと会食後8時よりDE　NICOLA教授，次いで私が約1時間講義をした。（動脈硬化を中心に）
7. 20	水	午前9時，Catholic 大学事務副総長Antonio J. S. Mottin氏を表敬訪問。 正午，日本総領事館新村総領事と会食。 午後6時半カトリック大学にてDE　NICOLA教授らと会食。8時50分より，高血圧の治療及び降圧剤の副作用などを中心に10時半まで講義をした。
7. 21	木	午前9時Catholic 大学，講義の打合せを1時間半行う。 講義は午後9時より「多血不飽和脂胞酸と過酸化脂質」について行う。
7. 22	金	午前中講義の打合せを10時より12時まで行う。午後休息。 午後6時より老人病研究所員と夕食を一緒にとり種々交換を行う。 夜8時より「動脈硬化予防の為の食事，老人の食事」について10時半

月　日	曜　日	内　　容
		まで講義。訪問教授の証書をもらう。
7. 23	土	森口教授の案内でGRAMADOを見学。
7. 24	日	午前8時VASP 160便にてRIO DE JANEIROへ。
		夜22：00発 PA202便にてNEW YORKへ出発。
7. 25	月	午前6：00 NEW YORK着。
8. 1	月	午後3：30 成田着帰国。

国　　名　ブラジル
指導科目　循環病学
派遣先機関　リオ・グランデ・ドスール・カソリック大学
専門家名　兼　本　成　斌
赴任時現職　東海大学医学部内科学講師
派遣期間　1983. 7. 22 ～ 8. 4

業務報告書

1.①diagnosis and treatment of arrhyjhmias in the aged (Ⅰ)
②diagnosis and treatment of arrhyjhmias in the aged (Ⅱ)
③newer aspects for the diagnosis and treatment of ischemic heart disease

①②は不整脈の生理から診断の仕方の概説を行ったあと具体的な不整脈について解説と診断について詳細に説明した。

対象者は初日40名程度（老人科の医療を含めて）2日目からは3割は脱落した。2割は相当熱心な聴衆であった。質疑応答で一部進めることができた。
大半が理解できているようであったように思われる。心臓病学とくに不整脈のような主題になると2分されてしまうのはどうしようもない。

興味あるDrsにはきわめて好評であったし反応もあったし説明すればよく理解してもらったと思う。一般的なレベルは低いと思う。しかし勉強意欲はかなりのものであるが……。

③は虚血性心疾患（冠動脈疾患）の新しい定義（歴史的変遷と新しい考え方）から始めて最近，導入された種々の器械を用いていかに有機的かつ効果的に診断でき，各々にどのような治療法を行うかについて概説した。内容的には必ずしも老人に限ったことではなかったが，一般的なレベルを知らしめることになったと思う。

受講者のレベルが千差万別のきらいがあり，どの程度に照準を合わせるかきわめて困難である。

2. 携行機材

老人医学研究所へ寄贈。よく活用してくれるものと信じる。

3. 見学した限りにおいてごくルーチンの検査しかできないようであった。それに保険のワクがかなり制限されており，絶対に必要な検査しかできないし，必要と思われても高価な検査は保険の審査を受けてから適用するようであり，患者にとっては恩恵は少ないようである。過渡期の現象として促えるべきであろう。全般的に見ると核医学の検査もできるようであり，まあまあのレベルにあるように思われる。

専門的なレベルに関しては老人医学一般という点を強調していることもあり，その一部門で

ある循環器病学ということになると，まだまだ道は遠しということであろうか。病棟で研修医の指導をしたが，各subspecialityについて指導者がいないということが悩みのようであった。ただし説明すれば理解できるだけの能力は十分に有している。全て過渡期の現象と理解して評価すべきであろう。

4. いくつかに分けて考えてゆくのがよいであろう。

1）ＪＩＣＡの目的：本来の目的は何なのか？他にも真の意味で日本医療を必要としている地域が世界には多いのではないか？

どの程度のレベルまで引き上げることを対象としているのか？

2）ＰＵＣ内での内科一老人科の相互交流は何如なのか？　老人科は独立しているとはいえ内科のsubspecialityとうまく交流してゆかなければ日本だけの支援に頼っているのは必ずしも妥当とはいえない。

3）大学院での講義について：対象があまりにバラツキすぎていて照準の合せ方が困難である。卒直にいってcost-performanceがよいとはいえないのではないかと危具する。彼ら自身まだまだ勉強が足らない。彼らにもっと血のにじむような努力が必要である。平均年令３５才にしては知識があまりに貧弱である。講義終了後，ごく簡単なテストを行ない１／３が不合格であるというのには殆んど驚きに近い。

4）老人科の医師たちにとっても有用な講義と思われるのに全員参加とはいえなかったことは残念である。

5）老人病研究所はうまく機能していると思う。あとはブラジル経済の復興を待つのみである。これからは姑息的な手段での援助というよりももっと大きな視野にたっての経済協力が真に望まれるのではないであろうか。町を往来する人々は表面的はきわめて平穏無事であるようにみえる。底流にはかなり深刻な問題があるはずであるのに。

6）今回の医学指導で現地の医師諸君が小生から知識を吸収してくれるところがあったならば幸せである。

業　務　日　誌

月　日	曜　日	内　　容
7. 22	金	ＰＭ５：２０成田発ＪＬ６２でBrazil（Porto Alegre）へ向けて離日。 同日ＡＭ１１：１５Los Angeles到着。ＰＭ１：００Scheraton Plaza Hotelにチェックイン
7. 23	土	ＰＭ１：３０　Los AngelesをＲＧ８４１で出立

月　日	曜　日	内　　容
7. 24	日	ＡＭ７：２５Rio Dejaneiro着。ＪＩＣＡ Suda 氏が出向かえてくれた。ＡＭ１０：００出立し，ＰＭ１１：５０にPorto Alegre到着。Dr.森口が出向えてくれた。直ちにPlaza Hotelへ。途中彼と簡単な打合せをした。＋１４℃思っていたより寒くなくほっとした。ホテルのヒーターの音がうるさい。
7. 25	月	ＡＭ９：４５研究所へ。通訳のDr. Antonio Carlos に今夜の講義について説明。なかなか熱心な男でＰＭ３：００まで続いた。午前中査〇大使が訪問された。 ＰＭ８：００～１０：４５までノンストップで"不整脈（Ⅰ）"の講義。終了したときにはいささか疲れた。ＰＭ１１：２０ホテル着。
7. 26	火	ＡＭ９：４５研究所へ。午前中はDr. Antonio Carlos と講義について打合せ。ＰＭ１：００まで続いた。 ＰＭ８：００～１０：４５まで"不整脈（Ⅱ）"を講義した。興味を示した医師たちとやや活発な討論をしながら講義をすすめた。
7. 27	水	ＡＭ８：４５　領事館へあいさつに行った。 ＡＭ１０：３０～１：００まで講義の打合せ。途中総長を表敬訪問 ＰＭ８：００～１０：４５まで"newer aspects for the diegnosin and treatment of ischemic heart dissease"の講義。昼少し休むとはいえ３回の講義が限度であろう。
7. 28	木	９：４５研究所へ。午前中Dr. 森口に施設を案内していただいた。機械類は殆んど全て日本からの寄贈であった。 午後は１：３０までDr. Cancelasに高血圧の治療方針について説明。２時領事館へ行き別送荷物の引き取りのため領事と空港へ。ホテルにもどったのはＰＭ５：３０であった。
7. 29	金	午前中，臨床のアドバイスを行った。 ＰＭ５：００より約３時間Dr. Souza と虚血性心疾患について討論し疑問点，現時点の考え方について説明した。
7. 30	土	ＡＭ９：３０研究所へ。coronary risk factorについて説明。英文抄録の修正を手助う。 ＰＭ７：００より領事館へ招待された。 ＰＭ１：００から大学院コース終了のパーティに招待された。終了後，森口先生にブラジル医療の現状について説明いただき，ボランティア活

月　日	曜　日	内　　容
		動の一端を見せていただいた。
7. 31	日	午前中病院見学。昼はシュラスコをご馳走になり，午後は市内見学をさせていただいた。
8. 1	月	Porto Alegre発—Riodejaneiroを経ってＬＡへ出立。
8. 2	火	ＡＭ１１頃ＬＡ着。ただちにHotel Ohtani へ。一日休養した。
8. 3	水	ＰＭ１：００ＬＡ発　ＪＡＬ６１便で離陸
8. 4	木	ＰＭ４：００成田国際空港着。長くて短かいブラジル医療指導旅行が終了しほっとした。

国　　名　　コロンビア
指導科目　　病理学
派遣先機関　　サンホセ病院
専門家名　　廣　田　映　五
赴任時現職　　国立がんセンター研究所病理部
　　第一組織病理研究室室長
派遣期間　　1983. 7. 11 ～ 7. 18

業務報告書

1　講演

題目1：早期胃癌の形態学的年代別推移

概要：我が国では最近の早期胃癌の肉眼形態は変わって来たと言われている。それは早期発見技術の進歩によって発見されている主な型が20年前のそれとは異なっている。たとえば大きさで言えば2㎝以下という非常に小さい型のものが多く，しかも不明瞭な境界であるため発見しにくいものが比較的多くなったからである。したがってコロンビア国でも近い将来発見されてくるであろうこの様な型を予想し，現在では診断困難な形が発見されるよう日常の診断に注意すべき点を強調した。

題目2：早期胃癌と前癌状態の形態的特徴

概要：国立がんセンター開設以来20年間に発見手術された早期胃癌1300例1432病巣の標本を基にして，肉眼ならびに顕微鏡的な形態学的特徴を呈示した。現時点における早期診断は形態学を基礎としているため，X－線，内視鏡，生検組織診断などの協力が必要であることを強調した。また前癌状態に関する古い概念と最近の知見についてもふれた。

題目3：胃生検病理組織診断の早期胃癌発見における有要性と信頼性

概要：診断機種や技術の進歩により，我国で一昔前までは発見出来なかったような小さくかつ不明瞭な早期胃癌が多数発見されるようになった。その為には，X－線透視のごとき従来の手法は勿論のこと，内視鏡生検材料による病理組織診断法の寄与する所が大きい事は言うまでもない。この最も正確とされる生検法も初回生検時には87％程度の正診率であり，10数％の症例については疑陽性の診断となり得ることを強調した。初回に決定診断の出来なかった症例がいかなる型の早期胃癌であったか病理学的に説明した。この様な症例の見落しのない様，注意すべき点を強調した。

対象者の水準：出席者の多くは同病院の放射線・内科・外科・病理等に従事している医師と，一部コロンビア国立腫瘍研究所など近傍にある医療施設から出席した医師等の外・レジデント，学生など約300名に達していた。一部の医師はすでにJICA企画によって

本国内やチリーで行なわれた研修コースで受講経験者も出席していた。これらの医師からの質問は的を得ていて活発な討義が行なわれた。

2　携行機材

1　国立がんセンター胃癌研究グループ編「早期胃癌マクロとミクロ」教育用スライド集（１１４枚入）とその英文の説明書２冊，携行し病院長　Dr. Villaneda Sato と病理部長 Dr. Cadena の２者に寄贈した。

2　スペイン語版「胃癌取扱い規約２０冊」も携行し，サンホセ病院内科医長 Dr. Penaloza に代表して受けてもらい関係者各位に配布してもらうことにした（別紙参照）。同国では上記携行機材の内容についても間接的に耳にしている医師が少し見られたが，英文やスペイン語のものを見たことのある人はほとんどなかった。診療の参考資料にするとか，教育や講演に大変有用であると感謝された。この種のものが一番喜ばれる傾向があり携行したのは大変有意義であった。

3　医療医学の水準

現地の有名な医師や教育研究職にたずさわる医学者は大かた北米で教育を受けた人が多い模様である。したがって米国で発展した肺・心・血管・脳外科などによる実際的医学に関しては，かなり高い水準にあると感じた。しかし死因統計によると癌が第２位を占め，コロンビア国に最も多い消化管癌に対する診断と治療に関しては我国の現状の約２０年は遅れている模様である。

顕微鏡的検査を行う病理学者による良・悪性の判定や癌の診断には大きな判定規準の差はないと感じた。実際同病院の内視鏡部を見学したが毎日多数例の生検を行っても早期胃癌は，ごく少数例で今年１月から６月までわずか５例のみであると言う。しかも発見される９０％以上は進行胃癌であることより，臨床的診断部門によって大きな見落しがあることが推察される。そこでどのようにしたらもっと多くの早期発見が出来るかという事が問題である。こと胃癌の診断に関して言えば集検業務に実際に携り，立派な成績を上げているグループを代表する様な日本の医師でしかも外国語の堪能な医師を派遣し，どの様な集団をいかなる手法で検査し，どのような患者に内視鏡検査を積極的に行うかという事を指導すべきである。南米人の要領の良さで，一見効率の高いしかもＸ線障害のない，内視鏡診断が先に普及してしまった感がある。この現状ではまさに本末転倒である。言い換えれば，武稽古をした事のない者に政宗の名刃を与えるが如く，である。

従って地味な稽古にも等しい検査法であるＸ線を中心とした集団検診を普及すべく，政府関係の指導者を説得し，医師の研修を行い必要な機器を寄与するのが急務であると感じた。学者によっては，この国は癌よりも感染症が急ぐ問題であると言う。たしかに１９７７年コロンビアにおける死因統計によると第３位に腸炎や下痢症があり，悪性腫瘍についで多い。恐らく消化管の癌とこの炎症性腸疾患を加えると心血管障害の次に位置する死因が消化管疾患と言うことになる。したがって炎症も腫瘍（癌）も早期発見が肝要であり，これらの為に

も上記の見解にある程度の妥当性があるものと思われる。したがって，X線を中心とした集検の普及が急務であり，ついで必要な内視鏡・生検等による確診をすることを普及する様進めるべきであろう。

4　滞在期間4泊5日と言う短期間では，見聞することも少なく受入国の医療現状を充分把握することはできない。しかし，直感的に言えることは消化管の放射線診断技術が遅れている。これを何とか日本のレベルに近ずければ，それから後の事はすでに並っている模様である。そのためには，将来指導的医師になるような若い放射線医を2年以上日本で，その道の達人のもとで研修させ帰国後，集検を実行させ，まず異常所見を有する患者を巾広く把握させることが最も効果的であろう。この様な地味な努力が同国の医療のレベルを本当に向上させることで，分子遺伝学や免疫的指向は，その後に来るべきであろうと思われた。

業　務　日　誌

月　日	曜　日	内　容
7.11	月	午後2時40分箱崎発のリムジンバスにて成田に向う。17時45分成田空港JAL62便で定刻より25分遅れて出発。機内にて講演原稿に再度目を通し睡眠をとる。 11時20分，ロスアンゼルス空港着。同空港は，オリンピックの前に大改築を行なうための工事で大変混雑していた。12時40分頃ジェラント・プラーツァラ・レイナ・ホテルにホテルリムジンバスで着いた。しかしチェックインが3時からのためホテルで昼食を取りUCLAハーバー・メディカルセンター病院の病理部に勤務しているDr. レチャーゴーを訪れた。最近，米国で問題になっているAIDS（後天性免疫不全症）の剖検所見の大要を聞き，組織標本を鏡検し，その一部を供与され，教育用に持帰ることにした。
12	火	早朝5時50分にホテルをチェックアウトし，ロスアンゼルス空港に向う。8時15分定刻に出発，マイアミ経由コロンビア・ボゴタ空港に17時30分頃到着。JICAボゴタ事務所長石井和男，ボゴタ日本大使館一等書記官小笠原両氏とサンホセ病院Dr. Jorge Leon と Dr. Maria Carolina 両先生の出迎を受け，JICA所属の車でボゴタ市中心のテケンダマ（TEQUENDAMA）ホテルに送られた。同夜9時から30分程同ホテル711号室にて，石井・小笠原両氏と共にボゴタに於ける小生のスケジュールの説明を受け，その他諸々の打合せを行った。
13	水	5時30分起床，8時朝食を取る。長旅と時差と海抜2600米という

月　日	曜　日	内　　容
		高所のためか軽度の頭痛と心悸亢進などにより食欲がなくコーヒーとミルク・トースト１枚のみを取った。 ９時 Dra. Maria Carolina とホテルロビーにて石井・小笠原両氏と共にシンポジウムとその他のスケジュールの説明を聞いた。 １０時　コロンビア政府企画庁（Department Nacional de Planacion）の Dr. Batemam と Dr. Yoranda の両氏を表敬訪問した。その時，Dr. Batemam 氏の話では，コロンビア国の死因統計では悪性腫瘍が心血管病につぐ第２位を占めるもので，その対策に頭を悩ましているが，癌病の専門家の訪問により，示唆に富む話をされることは大変有難いという事であった。 １０時３０分　ボゴタ日本大使館にて長崎大使を訪問「急な話しでしたが遠方から来て載き大変御苦労様です。」というお言葉をいただいた。
7.13	水	１１時３０分　市内レストランで石井氏の打合せ，某レストランにて昼食を取りながら行う。ＪＩＣＡ職員出張中の安本・木下両氏と同行し市内官公建造物を見学。 ６時３０分　長崎大使公宅にて日本食（懐石料理）の晩餐会に伊藤参事官，小笠原一等書記官と共に招待された。同席でコロンビア国の政治・経済・産業などの大まかな知識が与えられた。また，日本に於ける癌診療の最先端の現状に対する質問に出来る限り答えた。またこの時，本国における医療事状の最近の情報を何らかの形で，海外駐在員に伝達する必要があることが必要と思われた。
14	木	９時３０分　サンホセ病院大講堂にて「第一回基礎医学に於ける最近の進歩に関する国際シンポジウム」の開会式行なわれる。 現地国政府健康首 Dr. Garcia，ロサリオ大学医学部長 Dr. G. Ruede 外科学会長 Dr. Becerra などのお歴々からの挨拶があった。 ９時３０分から米国ＮＩＨのノーベル医学受賞者 Dr. Gadusek による神経系のビールス性疾患と言う題で特に，パプア・ニューギニアのKuru地方にみられる伝染性麻痺性の病気に関する講演を拝聴した。 午前１１時～１２時３０分　サンホセ病院講堂に於いて，最近の日本に於ける早期胃癌と言う題で講演後，それらの質議応答があった。 午後１時　サンホセ病院長Dr. Villaneda の招待によるランチョンパーティーに招待された。 午後２時から５時までニューヨーク・スロンケッタリング癌研究所の Dr. Koziner らにリンパ腫の免疫学的分類に関する講演など免疫学的講演を

月　日	曜　日	内　　容
		拝聴した。
		午後8時１０分　サンホセ病院主催のディナーパーティに出席
１５	金	午前8時からシンポジウムに出席したが予定が変更になり小生の講演は１０時１５分からとなり「早期胃癌と前癌病変の病理形態学的特徴」と言う題で英語で講演した。出席者３００名前後であった。
		午前１１時３０分から病理部長 Dr. Dario Cadena と病理診断上の問題例について討議した。この間，同室で簡単な昼食を取った。
		午後２時から「内視鏡による胃生検の病理診断の信頼性と有用性」と言う演題で約１時間，英語で講演した。
		出席者約１５０名，集検にＸ－線と内視鏡とどちらが良いか？　生検で強く癌を疑うと言う（Grap Ⅳ）診断の場合その患者を外科に送るのかなど実際的質問が出た。
		午後４時４５分　閉会式
		午後８時　サンホセ大学会議室に於いてカクテルパーティーに招待された。長崎大使，小笠原一等書記官，石井事務所長なども同席した。席上でシンポジウムの出席に感謝をし名誉会員にするという言の Diploma（証書）を授与された。
		９時～１１時　今回の招待講演に関する反省と今後の問題点に関して検討するために石井事務所長と一等書記官小笠原氏に同席して載き会合をもった。
１６	土	帰国準備にとりかかる。９時頃朝食を取る。１０時にホテルロビーに石井支所長，小笠原氏に見送られ空港に向う。
		午後１時３０分　AVIANCA　２２便でニューヨークに向う。
		午後８時３０分　ニューヨーク・ケネディー空港着。
		９時３０分頃，空港近くのインターナショナル・ホテルに着。同夜１０時ニューヨーク・マウントサイナイ病院の病理学者 Dr. Raybak に会い米国に於ける胃癌の早期発見と治療に関する現状を討議した。発見されたものはほとんど進行癌で５年生存率１０％以下であると言う。
１７	日	午後１時３０分　ＪＡＬ５便にてニューヨーク発。
１８	月	午後４時３０分頃　成田着
		５時４０分発のリムジンバスにて箱崎シティーエアーターミナルに来て７時頃無事帰宅した。
		この間体重減少２kgとかなりきつい旅であった。

I REUNION INTERNACIONAL SOBRE
INVESTIGACION BASICA EN MEDICINA

Perspectivas hacia una Medicina Moderna

PROGRAMA

HOSPITAL DE SAN JOSE
FACULTAD DE MEDICINA,
UNIVERSIDAD DEL ROSARIO

JULIO 14 - 15 DE 1983

AUDITORIO
HOSPITAL DE SAN JOSE
BOGOTA

PATROCINADO POR: COLCIENCIAS
HOECHST COLOMBIANA
QUIMICA SHERING
QUIMICA BAYER
EUROPHARMA

ORGANIZADO POR: LABORATORIO DE INMUNOLOGIA, DEPARTAMENTO DE PATOLOGIA HOSPITAL SAN JOSE.

CONFERENCISTAS INVITADOS

Profesor: Carleton Gadusek:	Instituto Nacional de Salud USA, Premio Nobel de Medicina.
Prof. Gerard Sauer	Jefe de Laboratorio de Virus DNA, Instituto Nacional de Cáncer. Alemania.
Dr. Benjamin Koziner	Jefe del Laboratorio de Inmunohematología Sloan Kettering Memorial Hospital N.Y.
Dr. Hideyuki Hirota	Jefe del Dpto de Patología gástrica, Instituto Nacional de Cáncer, Japón.
Dr. William Rojas	Director Científico del Centro de Investigaciones Biológicas. Medellín Colombia.
Dr. Luis Fernando García	Jefe del Laboratorio de Inmunología, Facultad de Medicina U. de Antioquia, Medellín. Colombia.
Dr. Alvaro Alegría	Decano de la división de ciencias. U. del Valle. Cali, Colombia.
Dr. Carlos Espinal	Director Grupo de Investigación inmuno-parasitología, Instituto Nacional de Salud, Bogotá, Colombia.
Dr. Jorge León	Jefe de Inmunología Hospital de San José, Bogotá. Colombia.

JULIO 14 DE 1983

8:00 a.m.	INSCRIPCIONES
9:00 a.m.	INAUGURACION Dr. Jorge García Gómez. Ministro de Salud de Colombia. Dr. Guillermo Rueda Montaña. Decano de la Facultad de Medicina Universidad del Rosario, Bogotá, Colombia. Dr. Efraím Otero. Director Colciencias, Bogotá Colombia Dr. Antonio Becerra Lara. Presi-Presidente Sociedad de Cirugía.
9:30 - 10:15 a.m.	VIRUS LENTOS Y ENFERMEDADES DEL SISTEMA NERVIOSO Dr. Carleton Gadusek. Premio Nobel de Medicina.
10:15 - 11:00 a.m.	PRINCIPALES CONTRIBUCIONES DE LA INVESTIGACION BASICA EN INMUNOLOGIA A LA MEDICINA ACTUAL. Dr. William Rojas. Centro de Investigaciones Biológicas, Medellín.

11:00 - 11:15 a.m. Café

11:15 - 12:00 m. VIRUS Y CANCER, LA NUEVA VISION DEL CANCER.
Dr. Gerard Dauer. Instituto Nacional de Cáncer. Alemania.

2:00 - 2:30 p.m. EL NUEVO APORTE DE LA CLASIFICACION INMUNOLOGICA DE LINFOMAS.
Dr. Benjamin Koziner. Memorial Sloan Kettering Cáncer Center.

2:30 - 3:15 p.m. LA INMUNOLOGIA DEL TRASPLANTE RENAL.
Dr. Luis Fernando García. Laboratorio de Inmunología Medellín.

3:15 - 4:00 p.m. Café

4:15 - 4:45 p.m. SESION DE PREGUNTAS SOBRE EL DIA.

JULIO 15 DE 1983

8:00 - 8:45 a.m. CARACTERISTICAS PATOLOGICAS DEL ESTADO PRE-CANCEROSO Y DEL CANCER GASTRICO TEMPRANO.
Dr. Hideyuki Hirota. Instituto Nacional de Cáncer, Japón.

8:45 - 9:15 a.m. ULTIMOS REPORTES DE LA INVESTIGACION SOBRE MALARIA.
Dr. Carlos Espinal. Instituto Nacional de Salud. Colombia.

9:15 - 9:30 a.m. Café

9:30 - 10:15 a.m. PRIMER MODELO QUE PERMITE ANALIZAR A NIVEL MOLECULAR COMO APARECE EL CANCER.
Dr. Gerard Sauer Instituto Nacional de Cáncer Alemania.

10:15 - 11:00 a.m. PRINCIPALES APORTES DE LA INVESTIGACION BASICA EN BIOLOGIA MOLECULAR A LA MEDICINA MODERNA.
Dr. Alvaro Alegría. U. del Valle.

11:00 - 11:45 a.m. CLASIFICACION INMUNOLOGICA DE LEUCEMIAS Y SUS IMPLICACIONES EN ONCOLOGIA.
Dr. Benjamin Koziner. Memorial Sloan Kettering Cáncer Center.

11:45 - 12:15 m. SESION DE PREGUNTAS SOBRE LA MAÑANA.

2:00 - 2:45 p.m. DESARROLLO Y UTILIDAD DE LA BIOPSIA ENDOSCOPICA PARA EL DIAGNOSTICO TEMPRANO DEL CANCER GASTRICO.
Dr. Hideyuki Hirota. Inst. Nacional de Cáncer. Japón.

2:45 - 3:15 p.m. VISION HISTORICA DE LA INVESTIGACION BASICA Y SUS RESULTADOS EN LA MEDICINA DE HOY.
Dr. Jorge León. Lab. Inmunología Hospital San José. Bogotá.

3:15 - 3:30 p.m. Café.

3:30 - 4:15 p.m. NUEVAS PARTICULAS INFECCIOSAS ASOCIADAS A LA ENFERMEDAD HUMANA.
Dr. Carleton Gadusek. Premio Nobel de Medicina.

4:15 - 4:45 p.m. SESION DE PREGUNTAS SOBRE LA TARDE.

4:45 - 5:00 p.m. RESUMEN Y CONCLUSIONES
Dr. Jorge León. Hospital San José. Bogotá.

UNA VEZ FINALIZADO EL EVENTO SUS ORGANIZADORES Y EL ICFES PREPARARAN UNA PUBLICACION SOBRE LOS TEMAS TRATADOS EN LA REUNION QUE SERA DISTRIBUIDA A PARTIR DEL MES DE OCTUBRE DEL PRESENTE AÑO.

ACTIVIDADES EXTRAS REUNION

Mesas redondas con Investigadores Nacionales y el Investigador extranjero invitado en esa área.

JULIO 13 INMUNOLOGIA DEL TRASPLANTE RENAL.
Dr. Luis Fernando García. Universidad de Antioquia.

JULIO 13 PATOLOGIA GASTRICA.
Dr. Hideyuki Hirota. Instituto Nacional de Cáncer.

JULIO 14 CLASIFICACION INMUNOLOGIA DE LEUCEMIAS Y LINFOMAS.
Dr. Benjamin Koziner. Sloan Kettering Hospital; Nueva York.

VALOR DE LA INSCRIPCION	$4.000.00
PARA ESTUDIANTES Y RESIDENTES:	$2.000.00
PRECIO PARA QUIENES SE INSCRIBAN EN LOS DOS EVENTOS	$6.000.00
PARA ESTUDIANTES Y RESIDENTES	2.500.00

Hoechst
HOECHST COLOMBIANA S.A.

INSTITUTO NACIONAL DE CANCEROLOGIA

DIVISION DE EPIDEMIOLOGIA

AÑO DE 1982
COLOMBIA

Tabla No. 11

DISTRIBUCION DE LOS CASOS DE CANCER SEGUN ORGANO AFECTADO

LOCALIZACION	SEXO		Total	%
	Masculino	Femenino		
Cuello Uterino	-	895	895	25.7
Piel	301	322	623	17.9
Glándula Mamaria	4	339	343	9.9
Estómago	130	99	229	6.6
Ganglios Linfáticos	102	56	158	4.5
Esófago	82	32	114	3.3
Hematopoyético	53	48	101	2.9
Ovario	-	86	86	2.5
Cuerpo Uterino	-	74	74	2.1
Recto	25	45	70	2.0
Tiroides	14	58	72	2.0
Metastásicos	29	37	66	1.9
Próstata	57	-	57	1.6
Pulmón	38	13	51	1.5
Tejidos Blandos	31	20	51	1.5
Hueso	22	17	39	1.1
Faringe	34	2	36	1.0
Testículo	36	-	36	1.0
Vejiga	23	9	32	0.9
Colon	7	18	25	0.7
Nervioso	14	11	25	0.7
Ojo	11	14	25	0.7
Seno Maxilar	18	5	23	0.7
Riñón	8	14	22	0.6
Lengua	12	8	20	0.6
Vulva	-	16	16	0.5
Labio	12	4	16	0.5
Glándula Salival	10	4	14	0.4

INSTITUTO NACIONAL DE CANCEROLOGIA

DIVISION DE EPIDEMIOLOGIA

AÑO DE 1982 Tabla No. 11

COLOMBIA

DISTRIBUCION DE LOS CASOS DE CANCER SEGUN ORGANO AFECTADO

LOCALIZACION	SEXO		Total	%
	Masculino	Femenino		
Hígado	5	8	13	0.4
Paladar	6	7	13	0.4
Retroperitoneo	8	5	13	0.4
Páncreas	5	5	10	0.3
Piso de la Boca	9	1	10	0.3
Mediastino	8	1	9	0.3
Fosa Nasal	3	5	8	0.2
Hipofaringe	6	2	8	0.2
Nasofaringe	6	2	8	0.2
Amígdala	5	2	7	0.2
Pene	7	-	7	0.2
Corion	-	10	10	0.3
Ano	3	3	6	0.2
Cavidad Oral	5	1	6	0.2
Encía	5	1	6	0.2
Vagina	-	4	4	0.1
Vesícula Biliar	-	5	5	0.1
Pleura	2	1	3	0.09
Timo	2	1	3	0.09
Tráquea	3	-	3	0.09
Intestino Delgado	1	1	2	0.06
Prepucio	2	-	2	0.06
Escroto	1	-	1	0.03
Orofaringe	1	-	1	0.03
Peritoneo	1	-	1	0.03
Uvula	1	-	1	0.03
Vías Biliares	-	1	1	0.03
TOTAL GENERAL	1.168	2.312	3.480	100.0
%	34.0	66.0		

INSTITUTO NACIONAL DE CANCEROLOGIA

DIVISION DE EPIDEMIOLOGIA

AÑO DE 1982

COLOMBIA

CANCER INFANTIL (0-14) SEGUN SISTEMA

Tabla No. 12

SISTEMA	SEXO		Total	%
	Masculino	Femenino		
Ganglionar	26	11	37	32.2
Hematopoyético	23	13	36	37.3
Huesos	4	5	9	7.8
Urinario	3	4	7	6.1
Ojo	1	5	6	5.2
Tejidos Blandos	3	2	5	4.4
Digestivo	1	3	4	3.5
Genital	3	1	4	3.5
Metastásico	1	1	2	1.7
Respiratorio	2	-	2	1.7
Nervioso	2	1	3	2.6
TOTAL	69	46	115	100.0
%	60	40		

国　　名　コロンビア
指導科目　小児悪性腫瘍
派遣先機関　国立がん研究所
専門家名　伊勢　秦
派遣期間　1983. 8. 1 ～ 8. 21

業務報告書

1. 講演，技術指導について

小児悪性腫瘍治療の進歩についての世界的趨勢と日本の現況について著者の経験を中心に1時間半にわたってBogotaの小児病院およびMedellinの小児病院において講演した。対象は100人前後で小児科医師が中心であり，レジデント，看護婦が加わった。英語で講演され，スペイン語に通訳された。多くの症例を呈示したのが印象深かったらしく多くの感銘を与えたものと察せられた。活発な質疑が行なわれ，好評であり，講演後にも実際の症例についての治療方針の質問を受けた。

また，国際小児がんシンポジウムが2日間にわたって開催され，これには招待教授として，髄外白血病について30分，悪性リンパ腫の化学療法について30分の特別教育講演を担当した。対象は，小児科医，小児外科医500人で英語，スペイン語の同時通訳の本格的な国際学会であった。この方は講演レベルが高過ぎた感じがあり，十分理解されたかどうか不明であった。もう少しレベルを落して一般的な説明と問題点を平易に説明し，症例も十分提示して教育的講演のニューアンスを十分出して話すべきであったと反省された。

技術指導については症例検討会に度々出席して，診断，治療について相談を受けて技術指導を行なった。

2. 受入国の医療，医学水準について

わが国の医学水準に比べて10年以上の遅れがあると解せられる。一般の小児病院では，わが国では20年前からみることのできない腸チフス，結核性脳膜炎などの患者が収容されている。小児がん診断技術も不十分で生化学的検査はほとんどできず，コンピュータートモグラフィー，超音波像などの検査もできない。大学病院の小児病院には，腫瘍専門家が1人いて診断と治療に当っている。欧米の治療方針にそって加療しているが，抗がん剤が余りにも高価であるために十分利用することができない現状にある。放射線治療は旧式のテレコバルトによる治療が可能である。

国立癌研究所は癌治療のレベルがコロンビア国内では最も高いものと思われるし，専門のstaffが多いが，研究ができる設備は全く欠除しており，臨床の治療が中心である。若い医師は先進国よりの知識吸収に熱意を燃やしており，この医療レベルは急速に進歩するものと

考えられる。

3. その他の所感，提言

Colombia 国は広大であるが，社会経済的に低い層が多く，これらの層の小児には驚く程，悪性リンパ腫，ホジキン病の発生頻度が高い。この事実は疫学的にも興味が深い。今後，共同して，この成因と治療に積極的に取り組み，わが国との比較研究によっても悪性リンパ腫の成因と治療に新しい事実が判明し，がん治療に大きな成果が上ることも考えられる。

今後とも，小児がんに限らず，がん治療と研究に対してわが国の医療援助を続けることが両国の国際関係にも大きな親密度を加える極めて重要な事柄と思われる。

業　務　日　誌

月　日	曜　日	内　容
8. 2	火	Los Angeles経由にて１９：２６　BOGOTA国際空港到着。 ＪＩＣＡ石井事務所長，日本大使館小笠原書記官，コロンビア国立癌研究所Greti医師，Boendin大尉，の出迎えを受ける。空港にてColombia ラジオのインタビューを受け，コロンビア医学の癌治療のレベル，日本の癌，とくに小児がんの治療現況，白血病の治療などについての質問を受けた。 ２１：００宿泊所，Tequendama Hotel に入る。
8. 3	水	日本大使館公邸へ長崎大使訪問，会談。 ＪＩＣＡ事務所訪問。スケジュールなど打ち合せ。 夜，石井ＪＩＣＡ所長，小笠原書記官と会食。
8. 4	木	国立癌研究所，小児病棟廻診，症例検討会 午後，国立小児病院において"小児癌の治癒の現況"について１時間余特別講演，症例検討会 ２：００ＰＭ　ColombiaTVのインタビュー（１５'）
8. 5	金	国立癌研究所内見学，紹介，　所長訪問，会談 午後，ＭＩＳＥＲＴＣＯＲＤＩＡ病院にて症例検討会出席
8. 6	土	ＺＩＰＡＱＩＴＲＡ，ＧＵＡＴＡＶＩＴＡ 訪問 ＭＩＳＥＲＴＯＲＤＩＡ病院長，ＬＥＳＴＥＩＥＢＯＮ博士宅に招待され，郊外の農場の中の博士宅で歓待を受けた。夕食会 １０：３０ＰＭ　ColombiaTVインタビュー放映される（５'）

月　日	曜　日	内　　容
8.　7	日	TEQENDAMA JIALLS 見学。
8.　8	月	国立癌研究所小児科病棟廻診，標本検討 小児科外来コンサルタント
8.　9	火	コロンビア小児科学会出席，小児腫瘍国際シンポジウムにおいて"小児悪性リンパ腫の化学療法"３０分講演
8.　10	水	コロンビア小児外科学会出席，小児腫瘍国際シンポジウム第２日目の席上"小児白血病髄外白血病"３０分講演
8.　11	木	午前中，国立癌研究所小児病棟廻診，所内リハビリセンター訪問。 夕方，国立癌研究所小児科医長 Zea博士宅の国際小児がんシンポジウムの講師全員招待された。米国のExelby博士，JAFFE博士夫妻，アルゼンチンのPABOLOVSKY博士，癌研究所小児関係医長らと出席した。 ２２：３０ホテルへ帰る。
8.　12	金	国立癌研究所外科手術室において，Hodgkin病の病期決定開腹術見学。 小児病棟廻診
8.　13	土	市内見学および市郊外見学 石井ＪＩＣＡ所長宅へ招待され会談
8.　14	日	市郊外見学（FAKATATIBA, SILVANIAN）
8.　15	月	空路 Medellin市訪問（Dr. Gretiと） Medellin university Hospital 外科訪問
8.　16	火	Medellin university childrens Hospital において 特別講演１時間"小児がん治療の進歩"院内見学，症例検討。 小児病院長OLAFF教授の自宅に招待され，会談，夕食会。 （Dr. Greti，小児腫瘍医長，小児外科医長夫妻出席）
8.　17	水	Medellin市より空路CALI 市訪問 CALI 対癌診療所訪問，所内見学 Diego Lopez 副所長（小児科）の自宅に招待され会談，昼食会。 午後，University Hospital 小児科訪問，血液専門外来見学，小児病棟見学。 夜，７：３０空路 BOGOTA に帰る。
8.　18	木	国立癌研究所，小児科病棟廻診 ７：００ＰＭ　日本大使館公邸においてReception，長崎駐コロンビア大使夫妻，小笠原一等書記官，Colombia大学教授，牛島ペルー大学教授

月　日	曜　日	内　　容
		他と夕食会。
8. 19	金	コロンビア癌研究所 Dr. Zea, Dr. Greti, Dr. Buendia, Dr. De-Soto, ＪＩＣＡ石井所長に送られて，Bogota空港出港。 7：30ＰＭ New York Kennedy国際空港着 International Hotel に入る。翌8月20日，1：30ＰＭ Kennedy国際空港発
8. 21	日	16：10 東京国際空港到着，帰国。

国　　名　コロンビア
指導科目　リウマチ学
派遣先機関　コロンビアリウマチ学会
専門家名　西　岡　久寿樹
赴任時現職　東京女子医科大学リウマチセンター副所長
派遣期間　1983. 12. 1 ～ 12. 9

業務報告書

今回，12月1日より同7日迄の7日間に渡り，コロンビア共和国を訪問する機会を与えていただきかつ有意義な経験をさせていただいたＪＩＣＡ医療協力部に心から御礼申し上げます。

ただ，私がＪＩＣＡの医療技術専門家として貴事業団からの御依頼をお受けし，幾つかの問題がございましたので列挙させて頂きます。

1）コロンビアリウマチ協会なる組織はDr. NunozというＳＡＮ・ＪＯＳＥ病院の８５才の医師が会長を務め，その組織形態が非常に不明確である。

2）今回のリウマチセミナーもコロンビア現地の人達の間での問題点はリウマチ熱であり，慢性関節リウマチではない模様。

3）聴衆者はかなりの人数が集まったが，私の講演の内容は一般的なリウマチ学の診断技術についてはともかく一歩病気の原因についての免疫学的・生化学的な問題点となるとほとんどeducationされていない模様である。

従って，もう少しlevelを落して感染症的な問題点と関節疾患について解説した方がよかったように思われる。

4）コロンビアリウマチ協会長のDr. Nunozは私の講演に大変興味を示したらしく，同時にリウマチ対策に対する強力な要請を日本リウマチ協会及びＪＩＣＡに行って来た。そこで私はDr. Nunozに別紙（同封した手紙）のような条件をつけて今後のプロジェクトを検討する前の課題とした。

5）日本リウマチ協会（ＪＲＡ）及び私の所属する東京女子医科大学はＪＩＣＡベースでもしコロンビア共和国が強力にリウマチ及びリウマチ熱対策に対する医療技術提携を要請されればいつでも協力を惜しまない。

但し，これは現在我々が民間ベースで進めている台北プロジェクトの型が一番望しいと考えられる。すなわち，相手国からリウマチ学の専攻を希望する若手の医師を一定期間当センターにて集中的にトレーニングし，さらにＳＡＮ・ＪＯＳＥ病院内にリウマチセンターを設立させる。

定期的に日本リウマチ協会から専門医を派遣し，現地で実際の臨床及び教育指導を行う。

6）日本及びコロンビア共和国共通の医学的学術的にみた課題として民族間によるリウマチ罹

患の状態を正確に把握することは重要な課題であると考えられる。特に，関節リウマチは日本でも難病とされているが，その一つの要因に「感染」という要因が大きく関与していることは否定できない。

しかしながら，日本の患者は余りにも多くの要因が関与し，疾病を複雑化させている。従ってこういった比較的発展途上国のような国を通しての調査結果は１つの大きな回答を与えると考えられる。

なお，私の講演内容及びフランスからのDr. Menkesの講演内容をコロンビア共和国においてスペイン語で本の型で出版されるにあたって，コロンビアリウマチ協会会長のDr. Nunozに要請し，その原稿を別便で送った。

業　務　日　誌

月　日	曜　日	内　容
12. 1	木	成田発―ニューヨーク着 ベルビュー病院（ニューヨーク）リウマチセンターの来日スタッフと打合せ（本件とは関係なし）
12. 2	金	ニューヨーク発マイアミ経由でボゴタ入り 現地のＪＩＣＡ石井所長，Ben高橋二等書記官の手配でimmigration手続，スムースに行く。
12. 3	土	Ａ．Ｍ１０：００　Dr. LAURENTINO　NUZOを石井所長の立会のもとに紹介される。８５才の老人で耳が遠い上に英語はカタコト程度の語学力。 しばらくして，SAN・JOSE 病院のレジデントがやってくるが，彼も英語がダメ。しかしながらリウマチ学には，大変興味を持って勉強しており，一時間位discussion。 同時通訳と称する人も現われSPANISH―ENGLISHのサイマルでやっと話がスムースに軌道に乗る。 明日からのセミナーの打合せ。
12. 4	日	オープニングセレモニーというので，行ってみるとバラバラとあちこちから，２０人位が集まって来て二時間位遅れてワインとオツマミで２０分位で終了。 石井所長，高橋事務官も何の為かよくわからないという。私も日曜日だからやむを得ないと思ったが，いったいどのようなセミナーをどこが主

月　日	曜　日	内　　容
		催して，どういう型で行なわれるか全く不明。
12.　5	月	９：００から始まるというので，一応フランスから来ているDr. Menkesと石井所長と一緒にSAN・JOSE病院の講堂に行ってみると誰もいない。 １０時頃にやっと数名の聴衆が集まり，Dr. Menke の講演が始まる。Dr. Menke はリウマチ学ではフランスのみならず，世界的に名の通った人ではあるが……。 私は通訳を個人的に雇いボゴタ郊外のメキシカン・インディオの居住するいわゆる貧民街の生活環境状態を視察しに行く。 LA CALERA という公園を抜けて，北の方へ車を走らせやがて一時間程でSOPO という街に着く。 小さなかやぶき屋根の家とやせこけた豚や犬，にわとりなどが狭い丘に点在している。その内の一件を訪ねた。カメラを向けても問題はないかと通訳に聞くと，「特に問題はないですよ」という返事なので，カメラを向けると多くの子供達が近寄って来た。 親らしい人達はインディオ特有のポンチョをまとっていたが，動物と一緒に生活しほとんど同じ家内に起居をともにしているという印象であった。もう一軒の家を訪ねてみた。そこには川が流れており，水流は余り豊かではない川の周辺で洗濯物を洗っている数組の家庭の主婦らしい人にあった。 以上のような生活環境はボコタの衛生環境を悪化させ，ひいては乳幼児の下痢や脱水による高死亡率，また，我々の分野ではほぼ撲滅されたと考えられているリウマチ熱の患者の届数度の増加を紹いていると考えられた。 一方，同じSopo では広い農場を経営している家は，主に立派な美しい建物であり，貧富の差が著明である。さらに，車を１０分位走らせボコタ市内へ水を供給している貯水場を視察した後でボゴタで一番大きな乳製品を作っている工場，ビンの工場を経て約９時間のボゴタ郊外の北東部山岳地帯の視察を終えて来た。
12.　6	火	AM９：００よりSAN・JOSE病院の講堂で，リウマチ性疾患の診断技術と病因論に関する講義を行う。 聴衆は別記の如くDr. Nunozに全てまとめてもらった。

月　日	曜　日	内　　容
		講義に対する反応は余りよくわからないが，前日同時通訳嬢とかなりつっ込んで打合せをしてあったので，English—Spanish への通訳はうまくいった模様である。 さらに講義が終った後，もう一つのlecture を希望され，私の特に専門とする化学的な面からのリウマチ病についての講義を即席に行なう。 この内容は少しlevel が高すぎたように思う。 そして二つのSectionの講演を終了して日本大使館に出向き，伊藤参事官と一時間程懇談をした。 リウマチ病の中でもコロンビアリウマチ協会のDr. Nunozは，リウマチ熱熱対策に技術援助をしてほしい点を強調されていた旨を伝える。 夜はボゴタ市にある日本でいえば医師会本部のサロンのようなところで，謝礼のパーティを受ける。 Dr. Nunozに，私は，ＪＩＣＡや日本リウマチ協会にリウマチ熱，対策の技術援助を要請する場合，今後若いリウマチ専門医を育てる事，コロンビアリウマチ協会の組織をもう少し，organize すること等，細かに通訳を通して指示した。（別便で送った手紙参照の事）
12.　7	水	Eastern Airline で帰国の途に着く。 ＪＩＣＡ石井所長，高橋二等書記官の見送りをボゴタ空港で受ける。 マイアミ—ロスアンゼルス経由で１２月９日無事帰国。

Rheumatology Clinical Research Center
Tokyo Women's Medical College
Tokyo, Japan

December 15, 1983

Dr, Nunoz
President of Colombia
Rheumatism Association

Dear Dr. Nunoz:

Thank you very much for your invitation to special seminor for the rheumatic disease fo the country. After the seminor, I talked with the Mr. Ishii head of JICA office of Bogota about the future problem of international corporation of the rheumatic disease. Japan Rheumatism Association(JRA) will give facilites for the further development and investigation of rheumatic disease, of course including of rheumatic fever as you mentioned me.

However, you must make it more clearly the organizing committee of the Colombia Rheumatism Association. For example about 3,000 members are organized in JRA. Annual meeting has been done since 30 years ago. JICA will have same opinion and worry about the future development about the rheumatic disease in your country. If you will want same kind of facilities to JRA or JICA, I hope that you should make the promise to us following problems.

(1) Organization of Colombia Rheumatic Association, for example, how about the annual meeting, total budget and expenses.

(2) We request you or CRA, the epidomidial study about the rheumatic fever. If it is so common in your country. This disease has been completely controlled in Japan or United States and other developing countries. I will also request you that you will show me about the course, one of the typical cases with rheumatic fever. The serum anti-SLO fiter among the normal population, especially, among the school age should be done from the epidemiological situation.

JICA has been done two medical project in your country.

4-1 Nishi-Shinjuku 2-chome Shinjuku-ku, Tokyo, Japan NS build. 4-F (03) 348-0988

Rheumatology Clinical Research Center
Tokyo Women's Medical College
Tokyo, Japan

After the finish one of these two projects, probably make a new medical project. At that time, JRA will also promote the rheumatic disease as a main project in Colombia.
I hope that you will educate younger doctor as a rheumatologist for the development rheumatology in your country.

Thank you again your invitation a kind hospitalities.

Very truly yours,

Kusuki Nishioka, M.D.
Vice president of
Rheumatology Institute,
Tokyo Women Medical University
General Secretary of
Japan Rheumatic Academy

KN:ni

4-1 Nishi-Shinjuku 2-chome Shinjuku-ku, Tokyo, Japan NS build. 4-F (03) 348-0988

国　　名　エクアドル
指導科目　放射線診断・消化器内科学
派遣先機関　エクアドル胃腸病学会
専門家名　① 山田達哉
　　② 吉森正喜
赴任時現職　① 国立がんセンター放射線診断部長
　　② 〃　内視鏡部消化器科医長
派遣期間　1983. 4. 19～ 5. 2

業務報告書

1. 講　演

Cuenca 市において（第3回エクアドル胃腸病学会）

① 早期胃癌の内視鏡診断

② すい臓癌と内視鏡的逆行性すい・胆管造影

③ 上部消化管内視鏡検査

について，それぞれ約1時間講演

①に関しては，早期胃癌診断の重要性，定義，肉眼分類，早期胃癌と進行胃癌のつながり，悪性サイクルなどを中心に，早期胃癌の内視鏡診断について述べ，最後に平坦型早期胃癌の診断についての将来の展望についても触れた。

②に関しては，すい臓癌一般，診断課程などについて述べ，すい癌の内視鏡的逆行性すい・胆管造影（ERCP）像について解説した。最後に2㎝以下の小すい癌の症例を呈示した。

③に関しては，上部消化管内視鏡検査に関する手技を解説し，胃生検についても述べた。さらに，胃隆起性病変および陥凹性病変の診断のポイントについて説明した。最後に胃の微小癌について症例を中心に述べた。

対象者はエクアドル胃腸病学会参加者約800人であり，病院勤務医，開業医が中心でありレジデント，学生も含まれていた。

講演はいずれもきわめて好評であった。

Quito 市において（「胃ガン早期診断」セミナー）

① 早期胃癌の内視鏡診断

② 内視鏡的逆行性すい・胆管造影（ERCP）

について，それぞれ約1時間講演。講演内容はCuenca市で行ったものとほぼ同様である。

対象者は勤務医，開業医を中心に約100名。

講演に対する反応はきわめて好評であり，講演終了後も質問や論文の別刷請求があった。

2. 技術指導

Cuenca 市において

第3回エクアドル胃腸病学会の会長Dr. Andrade のクリニックで技術指導を行った。使用した内視鏡の機種はオリンパス製ＧＩＦ－Ｋであった。

Quito 市において

４月26日から29日までの４日間，毎日午前中Social Security Hospital の内視鏡室において内視鏡の技術指導を行った。使用機種はオリンパス製ＧＩＦ－１ＴおよびＪＦ－１Ｔ患者は一日約８人，見学者は毎日約10人であった。

検査はいずれもスムーズに行われ，見学していた医師の中からも検査を受けたいという医師が何人か出てきた。

3. 携行機材

なし

4. 受入国の医療・医学の水準について

エクアドルには医科大学が６校ある。その内訳はクエンカ２，グアヤキル２，キト１，ロハ１である。

クエンカの場合人口約１０万に対して医師の数は約４００人だそうである。

一般に医師は勉強熱心のようであり，知識レベルは低くない。病気としてはアメーバー赤痢，回虫症，肝炎などの感染症が多く，結核も大きな問題のようである。

胃癌の頻度はきわめて高く，全癌の50～60％といわれているが，完全な統計はないようである。胃癌の診断技術は十分とは言えないが，必ずしも低くはない。ただ，一般に十分な診断治療のうけられるのはある程度裕福な階層に限られているらしい。

一般に啓蒙活動が遅れており，進行癌になってから来院する人がほとんどといわれている。

5. その他

対日感情はきわめてよく，多くの医師が日本へ行って勉強したいという希望を述べていた。可能な限り受け入れてあげるべきだと思うが，その際，エクアドル国内でどのような立場にある医師かを慎重にみきわめておく必要があるように思われた。個人を利するだけでなく，国家的にみて誰を選ぶべきかを考える必要があるようだ。

いずれにしろ，今日の講演・技術指導は好評であったようだし，エクアドル滞在中不快なことは全くなかった。多くの人々から是非また来てほしいといわれたが，機会があれば，もう一度訪問したいと思っている。

業　務　日　誌

月　日	曜　日	内　　容
4.19	火	17：20成田発JL062便にてLos Angeles に向かう。実飛行時間は9時間余り。 Los Anjeles に10：05着。Hacienda Hotel にて一服。 Los Anjeles 20：00発EU043便にてQuito へ向かう。
4.20	水	07：00 Quito 空港着（この飛行機は途中Mexico City に寄港）。 Quito 空港にて，大使館倉田氏及びDr Carrillos の出迎えをうける。 大使館を訪問し，安井大使にお会いする。Hotel にて一服す。 Quito 16：00発WB831便にてCuenca に向かう。 16：40 Cuenca 着。消化器病学会長Dr Bolira Andrade らの出迎えをうけ Laguna Hotel へ。 とに角，遠くて不便なところに来たなという印象です。学会の開期は，4月18日～22日で，日曜日（17日）はOpening Ceremony があったようです。4月25日（月）は，実技のデモを予定しているようです。我々の出発の少し前に電話してきたのは，期日変更の連らくが悪かったからでしょう。
4.21	木	8：00－9：00 CONFERENCIA MAGISTRAL "Diagnostico radiologico en el Ca, Gastrico Precoz" の題にて早期胃がんの症例を示し，また生存曲線などを示してX線診断の面から解説した。好評のようであった。 15：00～16：00 Conferencia Magistral "Nuevos metodos dela imajen radiologica" 日本で新らしく開発された早期時方法ですが，彼らも目を見はっていました。お金の面で買えそうもないと云ってました。何しろCTでさえ全国で2～3台とのことですから。 18：00－19：00 Mesa Redonda："Cancer Gastrico" Partcipantes　Dr. Tatsuya Yamada　－JAPON－ Dr. Masayoshi Yoshimori　－JAPON－ Dr. Juan Lope Gilbert　－Espana－ Dr. Guillermo Lopeg　－Quito－ Dr. Marcelo Recalde　－Quito－ Dr. Fernando Teran　－Quito－ Dr. Lautaro Pesantej　－Cuenca－

月　日	曜　日	内　　容
		Moderdor　　Dr.Bolivan Andrade　　—Cuenca—
		2時間に亘り，フロアーからの質問に答える形でDiscussionをすゝめて行った。どうも早期胃がんより進行胃がんの方が話題の中心になり我々の現状とはかなりギャップがあるように思われた。
4.22	金	12：00－13：00
		Conferencia Magistral "Diagnostico radiologico del Cancen de Colon"
		二重造影法を中心に大腸がんのX線診断についての話。相当の反応あり。
		この日で学会は一応終了した。我々をふくめ招待者には，1人1人Diplomaくれた。
4.23	土	学会の役員とその家族（総勢30人余）と山田，吉森で郊外へピクニック，1日をのんびりとすごす。
4.24	日	休み。但し，会長のDr.Boliva Andrad があちこちと案内してくれた。
4.25	月	Cuenca発　17：20WB838便にてQuitoに向かう。
		Quito 18：00着
		Alameda Hotel に入り，火曜日から金曜日までのセミナーについて打合せを行う。夜8：00より安井大使主催のカクテルパーティーに招かれる。
4.26	火	午前8：30 Social Security Hospital にて実技指導。3～4人の患者を実際にX線検査し，胃のX線検査方法を教える。
		11：00より12：00まで実際に撮影したX線写真を中心に問題点その他について説明。セミナーの実際の参加者は20人位。午后7：00～10：00"新らしいX線画像技術について" 1時間講演す。約100人の聴集がいた。
4.27	水	前日と同様に午前中は実技指導ならびに胃X線写真の撮影法について説明す。夜8：00より"早期胃がんのX線診断について"講演す。（聴集は約100人）
4.28	木	前日と同様であるが，実技指導と持参した早期胃がん症例を提示しての説明を行った。
		夜8：00より11：00まで安井大使に招待され倉田氏及び吉森医師と4人で会食し，医療技術指導その他について，いろいろと懇談す。
4.29	金	午前中のスケジュールは前日と同じ。
		11：30～14：30，大使公邸にて天皇誕生日のお祝あり，雨にも拘らず，多数のエクアドル人など300人位が出席。そこに招かれCuenca

月　日	曜　日	内　　容
		のDr. Bolian Andrade 夫妻に再会す。
		夜7：00よりColon Hotel にてセミナー終了のパーティーあり。
		夜10：30よりDr. Andrade 及びDr. 吉森と共にテレビのインタビューに応ずる。（Ecuador 全国ネット）
4. 30	土	8：30 Quito 発EU081便にてLima へ。Lima, 11：45着。
		前日飛行機事故のあったグァヤキル空港に寄港した際に，実際に事故機を窓より見た。余り気持のよいものではない。2年先のエクアドル消化器病学会はこのグァヤキルでDr. Moan が会長で行われる予定。
		Lima にて二世医師 Dr. Nago, Dr. Makino, Dr. Miyagi の出迎えをうけた。
		Lima で出発まで14時間程をすごす。
5. 1	日	01：55 Lima 発RG832便にて東京へ。途中Los Angeles にて2～3時間を費して，あと一路東京へ。
5. 2	月	予定通り 14：40 成田着。
		Quito のHoteを出たのが，4月30日午前7時。東京までは実質40時間余を要した長い長い旅でした。

（山田達哉）

・　・　・　・　・

4. 19	火	17：20 日本航空062便でロスアンジェルスへ向けて出発
		10：05 （ロスアンジェルス時間）ロスアンジェルス着
		20：00 （　〃　）Ecuatoriana 043便にてEcuador のQuitoへ向けて出発
		6：35 （エクアドル時間）Quito 着
		空港には日本大使館の倉田亮一氏（Vice-jefe de la Mision），"Carlos Andrade Marin" 病院のDr Marcelo Touma（エクアドル消化器病学会長），Dr. Luis Alfredo Carrillo らの出迎えをうける。
		（空港での写真は4月21日付"El Comercio" 誌に掲載された。）
		8：00 ホテルAlameda にて，Dr. Touma, Dr. Carrillo と胃ガン早期診断セミナーに関する打合せを行う。

月　日	曜　日	内　　容
		12：00　日本大使館へ行き安井芳郎大使に会う。
		16：00　WB837便でCuencaへ向けて出発
		16：40　Cuenca着
		空港では学会長のDr. Bolivar Andrade Cantosをはじめ Dr. Maria Elena Zarita やDr. Gustavo Calle Astudillo らの出迎えをうけた。
4.21	木	11：00　"早期胃癌の内視鏡診断"について約1時間講演，聴衆は約800人
		17：00　"すい癌すい臓癌と内視鏡的すい・胆管造影に関し，　約1時間講演　講演はいずれも好評のようであった。
		18：00　Round Table Discussion（胃癌について）
		参加者は
		スペイン　Dr. Juan Lopes Gilbert
		エクアドル　Dr. Guillermo Lopes
		〃　Dr. Marcelo Recalde
		〃　Dr. Fernando Teran
		〃　Dr. Laufaro Pesantes
		日本　山田達哉
		〃　吉森正喜
		司会は学会長のDr. Bolirar Andradl
4.22	金	12：30　Dr. Gustavo Calle Astudillo（学会のSecretario general）主催の昼食会に出席
		15：00　"上部消化管内視鏡検査"について講演を約1時間行う。
		18：00　Diploma伝達式
		22：00　学会の懇親パーティーに出席
4.23	土	（休　日）
		学会関係者との懇親会
		19：00　来週以後の仕事について打合せ
4.24	日	Social Security Hospital および学会長Dr. Andrade のClinicを見学
4.25	月	Dr. Andrade のClinicで内視鏡検査のデモンストレーション 内視鏡はオリンパス製のGIF－Kを使用する。検査がスムーズにでき好評であった。

月　日	曜　日		内　　容
		17：50	WB838便にてCuenca を出発
		18：00	Quito に到着。飛行中隣席にすわった Quito の医師から Ecuador の医療事情などをきいた。
		19：00	安井芳郎日本大使主催のカクテルパーティーに出席
4.26	火	9：00	Social Security Hospital で上部消化管内視鏡検査のデモンストレーション。内視鏡はオリンパス製GIF－1Tを用い，8人の患者の検査を行った。
		11：00	症例検討会
		12：40	製薬会社"life"の工場見学
		19：00	早期胃癌の内視鏡診断について約1時間講演。聴衆は約100人
4.27	水	9：00	内視鏡検査のデモンストレーション。患者の一人はセミナーに参加中の外科の医師であった。
		11：00	症例検討会
		20：00	Social Security Hospital において"すい癌と内視鏡的すい・胆管造影"について約1時間講演
4.28	木	9：00	Social Security Hospital で内視鏡検査実演
		11：00	症例検討
		12：00	Instituto de radiologia のDr. Alvareg の昼食会によばれる。
		20：00	安井芳郎日本大使および倉田亮一氏と夕食を共にする。
4.29	金	9：00	Social Security Hospital で内視鏡検査実演 内視鏡テレビジョンを使う。 患者の一人は大臣のDr. Rafael Marquez Moreno であった。
		10：00	症例検討
		11：30	安井日本大使主催のパーティー（日本大使公邸にて）に出席
		20：00	胃癌診断セミナー参加者へのdiploma 伝達式および夕食会
		22：00	Quito のテレビ（Teleamazonas. chanal 4）に出席 Christian Johnson のインタビューをうける
4.30	土	8：30	Ecuatoriana 081便にてQuito を出発

月　日	曜　日	内　容
		11：40　PeruのLimaに到着
5. 1	日	1：55　Varig 832便にてLima出発
5. 2	月	14：10　東京（成田）着

（吉森正喜）

国　　名　グァテマラ

指導科目　大腸X線・内視鏡診断

派遣先機関　汎米消化器病学会

　　内視鏡学会

専門家名　① 丸 山 雅 一

　　② 長 廻 　 紘

赴任時現職　① （財）癌研究会付属病院

　　内科医長

　　② 東京女子医科大学

　　消化器病センター講師

派遣期間　① 1983. 11. 12 ～ 11. 20

　　② 1983. 11. 13 ～ 11. 20

業 務 報 告 書

今回，GUATEMALA市において開催された学会は第１８回パンアメリカン消化器病学会，第５回パンアメリカン内視鏡学会および第１０回中米消化器病学会の３つであり，これらは合同学会の形で開催された。全体の参加者は約４２０名ということであった。

開催期日は１９８３年１１月１５日～１１月１８日までの４日間，HOTEL CAMINO REAL において行われた。また，この合同学会と一部重複して，１１月１４日～１１月１５日の２日間は Precongress Course が行われ，丸山・長廻はHOSPITAL GENERAL SAN JUAN DE DIOS において３０名の参加者に対して，大腸ポリープおよび早期癌の診断と治療についての講義および大腸のX線検査，内視鏡検査の実技指導を行った。

本学会は，従来，南北アメリカ大陸のすべての国をふくむ大規模なものであったが，今回は当地の政情不安定な状態を反映してか，外国からの参加者はきわめて少く，全体としても日本における地方学会の規模にも及ばないとの印象であった。しかしながら，我々日本人専門家に対する当地の学会関係者の心使いはきわめて行き届いたものであり，学会長のDR. ROBERTO SCHNEIDER をはじめとして，数人の医師達の手厚いもてなしにより，我々は当地滞在中きわめて快適な時間を過すことができた。

「学会の内容とその評価」

本学会のテーマは，

1. 肝疾患とくにウイルス性肝炎の臨床
2. 消化器疾患における経口的基礎栄養および高カロリー輸液
3. 大腸疾患のX線診断および内視鏡診断

4. 新しい胃酸分泌抑制物質の臨床

の4つであり，我々はテーマ3についてのすべてを委任された形になっていた（プログラム参照）。

GUATEMALA国に限らず，他の中米諸国および南米諸国においては，最も頻度の高い消化管癌は胃癌であり，大腸癌の頻度はきわめて低いといわれている。

したがって，今回我々が依頼されたテーマは，将来増加することが予測される大腸癌対策へのひとつの布石と考えられるものである。

例えば，前記HOSPITAL GENERAL SAN JUANDE DIOS における大腸X線検査のレベルはあまり高くはなく，当病院の放射線科医師とのDiscussion の内容，および撮影フィルムを見た印象からは，検査法やフィルムの読影に精通している医師ははとんどいないものと思われた。大腸の内視鏡検査においても状況は同様であり，ファイバースコープによる検査は直腸～S状結腸までにとどまり，また，内視鏡的ポリペクトミーの技術を習得している医師は皆無であった。

したがって，今回，オリンパス光学（株）の多大な協力によって，内視鏡の光源装置，高周波発生装置が準備され，また，VIDEO CAMERA により参加者全員に長廻が高度な内視鏡検査の技術，とりわけポリペクトミーの実際を供覧したことはきわめて意義のあることであった。

次に，学会における講演に対する反応であるが，質問やコメントの内容から判断する限りにおいては，一般的，基礎的事項がほとんどであり，自らの経験に基く演者の発表内容に対するDiscussion はなかった。

学会の全体的な印象については，我々は一部の一般演題および胃癌についての Round Table Discussion に参加したのみであり，断片的なものにすぎないため評価を控えたいと思う。ただし，胃癌のRound Table Discussion において CHILE の DR. PEDRO LL--ORENS が日本国政府，JICA の協力により行われた胃癌の集団検診の成果を詳細なデータにより発表したことに感銘を受けた。

最後に，在GUATEMALA日本大使館の浅田大使，および西沢，鈴木両書記官の御厚意に対し深く感謝の意を表します。

追加

携行機材（大腸ファイバースコープ）については，GUATEMALA消化器病学会に寄贈ということにし，follow-up は日本大使館鈴木氏に依頼した。書類については近日中に確認の予定。

業務報告書

月　日	曜　日	内　　容
11.13	日	PA022　午後9：30（定刻より約1時間の遅れ）GUATEMALA CITY着。日本大使館　鈴木氏・GUATEMALA外務省関係者およびGUATEMALA消化器病学会DR. ALEJANDRO HERNANDEZ出迎えによって通関手続きその他すべてスムーズに運ぶ。 HOTEL CAMINO REAL着後，DR. ALEJANDRO HERNANDEZと翌日よりの学会日程についての打合せ。
11.14	月	午前8：30　DR. A. HERNANDEZの車でHOSPITAL GENERAL SANJUON DEDIOS（6か月前にオープンした新病院，GUATEMALA市最大，ベット数1,000）へ。 Precongress Course におけるlecture および実技指導開始　出席者30名。 午前9：30～10：30　長廻　大腸ポリープおよび早期癌の内視鏡診断，病理についてのlecture 10：45～11：45　丸山　大腸ポリープおよびX線診断についてのlecture HOTEL CAMINO REAL で昼食後 午後2：00　丸山　HOSPITAL GENERAL へ。大腸X線の実技指導。患者は男性2人。最初の患者はアルコール性肝硬変，腹水高度，前回X線検査のバリウム残存のため中止。 2人め。癌性腹膜炎のため腹水高度，衰弱高度。十分な検査不可。大腸にわずかに転移性癌の所見を認めたのみ。検査終了後約1時間質問に答えて，午後4：30終了。 午後8：00より浅田大使公邸において夕食。大使夫妻，大使館西沢・鈴木氏。
11.15	火	長廻　午前8：00　HOSPITAL GENERAL へ。 内視鏡の実技指導。患者4人。すべて大腸ポリープあり。 VIDEO CAMERA によるデモ。オリンパス中島氏検査および器具の準備に協力。いずれの患者においても内視鏡的ポリペクトミーを試み成功。出席者はすべて満足とのこと。 以上で Precongress Course 終了。 午後は休息。 夜8：00より国立劇場において学会の閉会式。出席（丸山・長廻）

月　日	曜　日	内　　容
11.16	水	丸山午前中学会。胃癌の Round Table Disucussion で発言。 長廻，講演準備
11.16	水	午後3：30～4：15 長廻「ポリープおよび早期癌の内視鏡診断」の講演 午後5：15～6：00 丸山：「ポリープおよび早期癌のX線診断」の講演 以上で予定の日程を終了。

国　　名　メキシコ
指導科目　消化器病学・消化器内視鏡学
派遣先機関　メキシコ消化器内視鏡学会
専門家名　大沢　仁
赴任時現職　東京大学附属病院分院内科助手
派遣期間　1983. 9. 9～9. 21

業務報告書

昭和58年9月10日より20日までの10日間。そのうち，消化器内視鏡関係者との親密な接解は約8日間という短い期間であったが，多くのProfessors達や若い医師群との討論，話し合いの中で私なりに得たものを書き残そうと思います。

在メキシコ中は，ホテルの室に帰るのが，12時前後，時に3時であり，朝7時30分起床8時30分～9時の学会に出席というhard scheduleで1週間の平均睡眠時間は4時間半という強行軍でした。

メキシコの医学水準

いろいろな事情が関係している。

メキシコシティ内の大病院では，世界の最先端の知識と医療機器を有している。地方の病院では程度の差はあるものの，これに劣る。知識体系は米国の影響が強い。ひとつにはメキシコ全体が米国の影響下にあること。第2には，ほとんどの医師が優れた人が米国へ留学するというコースをとっているということ。

第3には，世界最先端の知識を，米国のcomputerに連ねた端末機にて，得ており，その影響を受けている。しかし，Drsの全体的な発想は必ずしも米国的ではなく，かなりメキシコ的である。彼等は気付いているのであろうか。

地方では雑誌等で知識を得ても，それがどれ程具体的な実用性を持っているかの判断を下し得る人材に乏しく，今回はずいぶんと，その様な判断を求められることが多かった。

メキシコ消化器内視鏡学会の水準及び状勢

現在成長過程にあるこの学会は構成員約180人。この内，満足すべき技術を有すると思われる人約120人。最先端の技術を一応は持っている人20～30人弱と思われる。

日本の学会と異なり，新卒のDrは入会出来ない。外科，内科又は消化器病専門科として訓練を数年受けて後，何らかの実績を学会に発表し，Membershipを得るSystemである。従って人員的にはその成長は遅い。トップと最下位の人達との差は大きい。

米国で訓練された人達と，長期在日して，親日的な人達とにProfessor群は分けられる。

又，日本に留学した新進の若き医師群と，それを越える人数の留学希望者群がいる。日本が彼等を援助し得る余地はここにある。今援助できなければ，彼らは全て米国志向となってしまう。最も親日的と思われるのは，

Dr. de la Torre， Dr. Gonzalez Loye それに Dr. Ramirez Degollado が加えられるべきか。彼らの所信，考え方等，まことに日本的である。１９８３年度，消化器内視鏡関係の留学生が０であったことに彼等は真に無念の意を表した。（留学生数１００→５０に減り）これは或は若干の誤解があった様である。メキシコ側は，日本政府の意向と考えたフシがある。実際には，メキシコ政府の意向であった。上原所長と話し合い，来年度は，彼等 Professors が直接メキシコ政府へ働きかける様提案した。

次に問題になるのは，メキシコ内での内視鏡機器の供給状況である。現在ほとんどの病院が，内視鏡専門医がいるのに Scope の絶対的欠乏状態があることに悩んでいる。現在でも，日本より約 1.5 倍高く，それは為替を考えれば約 3 倍にもなろうか。又米月デノミが行なわれればメキシコ側からみた価格は天井知らずとなる。一方故障した機器は月の単位でみなければ修復できない。それは Olympus が徹退したことから生じている様だ。現在Ｆｕｊｉ －non が進出しているが，責任企業の交替が是か非か，可か不可か問題である。

いくつかの病院では使用可の機器が０ないし１本であり，医師が遊んでいる状況がある。修復状況の改善が望まれる。

講演内容について

President からの親書では世界の Topic を，ということであった。しかし，Topicに対してはほとんど質問がなかった。彼らに経験がないからである。質問された内容を検討すれば，それは，我々が日本で日常的に診療の場で，討論している内容であり，研究している内容ではない。即ち，彼らに必要なのは，彼等の医療水準のすぐ上の知識とそれらの体系的，具体的裏付けではないかと感じた。

“Topic を”というのは，彼らの体面を考えたことであり，実情とやや離れていると考えた。従って，私は次回からは，Topic を１－２題そしてむしろ具体的であり，且つ彼らの要求水準を踏まえた演題を４－５題という内容の方が，実になると思われる。

又外科的な質問が半数を占め，外科医の派遣が更に望ましく，endoscopist（できれば physician を surgeon ）という組合せが良いと考える。

メキシコ人との交流

あれだけ親しみのもてる人達はいない。しかし私は，Most of Japanese professors are only a Japanese という言葉を聞いた。今までの歴史の中で何らかの問題があったようで，彼らを，そして彼らの置かれている現状を理解してほしいとの切なる要望があった。そ

れが何を具体的に意味するかを考えた後でなければ真の援助は困難ではないかと思った。

私の接触した人達は選ばれたエリートである。彼等は一般のメキシコ人と異なり，働くことを美徳と考え我々とほとんど同じ時間働いている人達である。誠実で知性があり，陽気であった。おそらく，一般的なメキシコ人は，彼等とかなり異り，それがメキシコの現在の問題の本質であろうと思われる。

消化器内視鏡の分野では，日本は世界で最も数多くの人材を保有し，且つ，世界で最も優秀な機器を生産しています。おそらく，日本が医学の分野で，メキシコに大きく貢献できるのはこの分野しかないであろうと思われます。

メキシコが経済的な破綻を来しつつある現在，日本の援助もあり，ここまで進歩してきたメキシコ消化器内視鏡学に我々の援助が役立つことは目にみえています。彼らは切にそれを望んでいます。Dr. de la Torre を中心とした人達と親密な連絡をとって頂きたいと思います。

メキシコ留学生達の効果について

１０年以前に来日した人達は親日的ではなかったが，実力については疑問を持たれる人がいた。１０年前後の人達の内数人は，現在，トップクラスにいる。それ以後の人達はそれぞれ年令に応じた地位にあるがむしろ，若い人達にも，人材が多く，帰国した人達の活躍の場を，広めてあげたいものである。

全ての留学生に逢えなかったので，極論はさけるが，彼らの間で実力，やる気にかなりの差がある。Selection の段階で何か問題はないのだろうか。と考えます。というのは，アメリカ留学生の中に優秀な人材を散見したからです。

それと１０年前までに効果があがっていないのは，ひとつには我々，日本側に問題があります。我々の側に成文化された教育プログラムを持つ機関が少いということです。

未だに残る徒弟制度的教育。日本的ナーナー。これらは米国におけるシステム化された教育プログラムに比し，あまりに貧弱です。それは又，我々が日本の後輩を教育する時のひとつの課題でもあると考えました。

以上我々の反省に到る有益な学会出張であったことを述べて，舌たらずの乱文を終ります。

業　務　日　誌

月　日	曜　日	内　容
9. 9	金	成田空港出発　ロス，アンジェルス着　ヒルトンホテル宿泊
10	土	ロス，アンジェルス発（Mexicana 航空）メキシコシティー着 ＪＩＣＡ甲斐さん，松田さん，Dr. de la Torre 夫人（Dr. de la Torre 代理） 松田氏，Dr. de la Torre 夫人と Chihuahua まで同行する。

月　日	曜　日	内　　容
		（Aeromexican） chihuachua空港にてDr. Barrera と会合　ホテル着。
9.11	日	昼　Dr. Barrera と会食。学会の目的，メキシコの現状等の討論をする。日程等の打合せを行う。Barrera 宅訪問。 夜　Dr. de la Torre 及びその夫人 Dr. Gonzales とその夫人と会食。それぞれ日本への好意の表明と現在のメキシコ内視鏡学会の現状等の分析，討論を行う。
12	月	12日～14日は若手医師及び学生達への，消化器内視鏡学の入門コース。コーヒーブレーク30分×2　ランチタイム1時間半及びラウンドテーブル1時間の討論に参加する。外科的質門が多い。6時30分終了 8時30分より Dr.（President）Barrera 宅で garden party 11時30分まで，若手医師の車で討論しながらホテルに帰る。
13	火	9時40分～10時20分，Early diagnosis of gastric cancer の講演。11時20分～11時50分　Laser endoscopy of gastric bemgi and malignant polyps and augiomatoses の講演。12時10分～13時　round table 参加。 16時30分～17時15分　round table 参加
14	水	10時20分～11時 Dynamic diagnosis of the abdominal disease 講演 11時～11時30分　coffee break にて討論 11時30分～12時30分　round table 13時～14時20分 Lunch with proffessors 15時50分～16時20分　round table 夜　Folle - ballet 招待される。
15	木	12時30分～13時　ERCP its usefullness and applications 講演。 13時～15時　8人のDr と5人の夫人達と会食 16時30分～17時30分　round table 学会終了　18時30分 21時より独立記念式典にて，市庁舎に招待される。
16	金	10：30～11時　early diagnosis of gastric cancer 講演 16時30分～17時30分　round table 18時30分　学会終了 20時30分　夕食会　～23時30分～3時AMまで若手医師達と討

月　日	曜　日	内　　容
		論，大変感謝される。
9.17	土	10時～10時30分　round table
		12時閉会式　感謝状と記念品を贈られる。
		次回　President には若き Santiago Gallo が選ばれた。
		2時より Barrera 宅にて　Garden party 学会のメンバー及び招待教授全員参加する。party は歌あり踊りありのにぎやかなものであるが，Professor 達とは，現在のメキシコ及びメキシコ消化器内視鏡学会がかかえている諸問題を，又若き医師達とは彼等が日常臨床上で悩んでいる諸問題について，討論する。
18	日	Chiuhuahua　発　Mexico city　着
		飛行機内ではDr. de la Torre　と同席し諸問題につき討論提議する。
19	月	在メキシコ日本大使館訪問。菊地大使と歓談。その後JICA上原所長と，意見の交換，報告を行い，又，今後の問題について討論，討議する。
		夜　上原氏と会食する。
20	火	Mexico city　発（JAL）　Vancouver　経由にて
21	水	成田着

国　　名　メキシコ
指導科目　外科医療技術
派遣先機関　国際肝臓外科学会
専門家名　杉　浦　光　雄
赴任時現職　順天堂大学医学部第二外科教授
派遣期間　1983. 11. 16～11. 23

業務報告書

門脈圧亢進症（食道静脈瘤）の外科治療（とくに杉浦法について）と，日本の肝硬変，食道静脈瘤の原因となる門脈圧亢進症について。

(1) 講演，技術指導について

(a) Conferencia Magistral. Cirrosis e Hipertension Portal en Japan
（日本の肝硬変と門脈圧亢進症について）
日本の肝硬変の概要，とくに最近アルコール性肝硬変が増えたこと。
私共の30年以上にわたる門脈圧亢進症の病態をX線写真や病理標本写真などを用い，よく説明できたと思う。

(b) Tratamiento de Urgeeia de la Hipertension Portal Hemorragia
（門脈圧亢進症の食道静脈瘤破裂例の緊急治療）
杉浦法の緊急手術の要領と，好成績を得ている根拠について説明。

(c) Tratamiento Quirurgico Electivo de la Hipertension Portal Hemo--rragica　（食道静脈瘤への待期的外科治療）
出血がとまったあとにどのような治療をするか，杉浦法を中心にして説明した。

(d) 食道離断術（杉浦法）の映画とその後の手術手技の詳細な討論
対象者の水準は門脈圧亢進症を扱う専門家（外科，内科，放射線科医など）と興味をもつ中南米の外科の研修医。専門家の集まりといってよい程で140～160人の集合。反応は4～5時間も航空便で飛んで集まっている位で，大変な反響があった。10数人の人と2人ずつ並んでは記念写真をとり，この学会へ出席した証明書へのサインを多くの人に求められた。質問は多数あり，拙い英語でやっと対応できた。中南米では恐らくこの手術方法が確実に普及すると思われた。

(2) 携行機材について
国立栄養研究所外科Dr. Orozco 宛に食道離断術（杉浦法）の手術映画，食道離断術用鉗子を寄贈した。
Dr. Orozco は同研究所の門脈圧亢進症クリニックの主任で同疾患の研究，治療でのメキシコ及び中米のトップであり，凡ゆる機会に利用されると推定する。すでに杉浦法の手術

を不十分な手術器械で約５０例施行しているとのこと。

(3) 受入国の医療，医学水準

メキシコ全般では医療水準は決して高くないが，むしろ，これは国全体としての国民の医学知識がほとんどないことが原因と思われる。専門分野での水準はレベルは高く，Dr．Or－－zcoらはすでにスペインなどスペイン語圏へは杉浦法の手術などについて出張講演を行なっている様子です。

(4) その他

従来，欧米を中心として発展した血管外科からの発想によるものと，全く正反対の発想で，さらに外科医の常識を破る杉浦法という手術術式を１９６７年から開発し，１０年前（１９７３年）に初めてアメリカ胸部外科学会で成果を発表した。当時，ほとんど注目されなかったが，４年後の再度の発表（１９７７年）と手術術式の詳細映画で発表（１９７８年）したことから，世界的に注目を浴びた。世界各国からの自主的な手術見学が続き，各国で追試を始めたが，正確な医療技術が要求されることから，結果は賛否両論であり，北イタリア，南スペイン，メキシコ，インドネシア，韓国，ハンガリー，ポーランドで好成績で施行されている。イギリス，西ドイツ，フランス，スウェーデン，ベルギーの外科医は手術を見学しているが，まだ確実に実行されている段階ではなさそうである。

以上の背景から，日本で好成績をあげるのは疾患の内容そのものが違うのではないか，手術術式以外に実際の患者の選択などに何らかの秘密めいたものがあるのではないかと大いに関心と疑問を寄せていた。これらが今回の招請の原因と思われる。今回の学会には北中南米の専門家がわざわざ集まっており，南米の専門家からの講演依頼があった。

今後とも講演とともに医療内容を正確に伝える映画の提供を続けさせてほしいと思う。積極的な援助を，経済的援助を含めてお願いしたい。

欧米は誇り高く，現在の私共の手術と論争しておりますが，３０～４０年にわたる凡ゆる努力がガラッと崩されるわけですので専門家としても感情的なものがありましょう。

なお，空港への往復，出迎え，通関，ホテルとの交渉など国際協力事業団メキシコ事務所所長上原盛毅氏，甲斐氏らの積極的な御援助があり，大変助かりましたことを付記致します。

業　務　日　誌

月　日	曜　日	内　容
１１．１６	水	１８：００成田発ＪＬ０１２便で出発。バンクーバー経由でメキシコシティに予定よりやや遅れ，１６日（水）１８：１０到着。 ＪＩＣＡ某氏，Dr．Orozco 氏とその教室員多数の出迎えを受ける。 ホテルに直行。夕食後，就寝。
１１．１７	木	朝食後，学会場の視察をし，２０日（日）の手術映画の試写施行。３年

月　日	曜　日	内　　容
11.17	木	前に比べて市内はやや汚れた感じがする。学会場は，宿泊したEl Presi－－dente Chapultepec から30㎞以上離れており，車で片道30分以上を要する。Dr. Orozcoらの案内を断わり，自由行動とし，演説原稿の整理，スライドの引合せに終始。
11.18	金	起床5時40分。朝食後，学会主催者の迎えを受け，スペインのDr. Moreno アメリカのDr. Conn，Dr. Salam，Dr. Starzl らと朝ホテルを出発し学会場へ。午前の部の討論に加わる。昼食は割当てのうまくないメキシコ料理。午後30数分の特別講演。20時，Dr. Orozcoら主催による各国招待者の招宴あり。メキシコ料理，ワイン，テキーラなど。ホテル着19日（土）午前1時。
11.19	土	朝食後，主催の迎えを受け，招待者一同と学会場へ出発。朝7時30分午前，午後の演説とそれぞれの討論に参加。同時通訳はあるが不十分。学会場が市内から離れ，交通の便も悪いようで完全な缶詰状態。18時ホテルへ帰着。18時30分，院長私邸での招宴出席のため外出。夕食までの限りない2時間の会話は学会演説よりも大変な労働。ホテル着23時30分。
11.20	日	朝食後，迎えを受け，学会場へ9時30分出発。10時30分からのFilm Sessionに出席。14時終了。ホテルに帰着し，休息。自由行動だが疲労極めて著明。
11.21	月	明日，早朝出発のため帰国の準備を始めるが，メキシコ料理，学会のハードスケジュールその他から体調をくずし疲労状態から脱却できない感じ。昼食，夕食は日本料理店で節食する。
11.22	火	6時起床。7時30分ホテル出発，空港へ。JL011便にてバンクーバー経由で成田空港へ帰国。

国　　名　メキシコ
指導科目　大腸癌の治療・診断
派遣先機関　メキシコ消化器病学会
専門家名　小　山　靖　夫
赴任時現職　国立がんセンター病院病棟部長
派遣期間　1983. 12. 3～12. 13

業務報告書

1　メキシコ消化器病学会に出席，特別講演及び映画供覧を行なった。

聴講者は，メキシコ消化器病学会会員で，専門医及び専門医となるべく修練中の医師である。（日本とは医師及び医療制度が大いに異なる。）映画2篇（大腸ファイバースコーピーの技術），（骨盤内臓全摘術）講演2題（大腸癌の外科的治療），（大腸癌の早期診断），の計4回 presentation を行なったが，出席者数は200－500名，反応は，学会主催者側の計画に討論時間が組み込まれていなかったことも関係すると思われるが低調。メキシコの死亡率は，疾患別に見ると，感染症，血管障害，（動脈硬化，心血管障害など）が上位を占め，癌による死亡は順位として低い。本消化器病学会でのテーマ（演題）約150題のなかで癌を扱っているのは，数題にすぎない。そのうちの半数は私の演題である。このような状況で，私が用意して行った発表内容は，必ずしも適切でなかった部分があったと反省された。しかし，少数の専門家及び専門指向の若い医師のなかには，強い印象を与えたのか，講演のあとで「手術を見たい」「日本に行って勉強したい」などの反応があった。

2　学会出席中に開催場所となっている国立医療センターの一部を見学したが，設備，医療システムは，米国風に完備しており，スタッフの数も多く高水準の医療が行なわれている。しかし，この医療センターを利用出来る市民は，経済的に恵まれた階層に限られており，全体的には，医療レベルの格差が極めて大きいようである。

3　滞在中，学会との連絡，学会当事者の約束事と実施のされ方などが，日本での理解と異なっていて，何回もイライラしたり，土壇場になって慌てたりすることがあった。その度に，JICA現地職員や，日本企業現地職員の御厄介になった。そのことについては感謝しているが，もう少し，事前の情報収集を行ない，出発前に準備すべき内容を知らせて欲しいし，現地での主催者側窓口等についても明確に定めておいて頂いた方が有難い。

今回は，私自身の不注意のため，盗難，外傷など，色々のアクシデントにより，現地医師達との交歓の時間が少なくなったのは残念であった。次年度も日本からの派遣要望があるとも聞いているが，チームを組んで行くことが望ましいと思う。（例えば，今回であれば，診断と治療を分担するなど）。

尚，同学会出席のエクアドル胃腸学会会長Dr. Carles Moranvera 教授より，1985

年6月開催の同学会に，招待したいとの申し込みがあった。個人としてはお受けしたいと思うが，公的機関を通じて申し込まれるよう返答した。（invitation letter コピー同封）

業　務　日　誌

月　日	曜　日	内　　容
12. 3	土	18：15発の予定は，4時間以上遅れて，成田発PA－622。15：00頃ロスアンゼルス着，予定の乗り継ぎ便に遅れ，パンアメリカン航空が用意した同市内シェラトンホテル泊。
12. 4	日	12：10発予定のメキシコ行PA022便に乗るため9：30ホテルをチェックアウト。ホテル玄関で何者かに上着背面をチョコレート入り飲料で汚染された。仝ホテル洗面所で汚染部を洗っている際に上着内ポケットに入れた，現金とT・Cを盗難，ホテル警備員，市警察に事実を報告の後予定便に機乗，任地着。現地JICA所長上原氏に事情報告。
12. 5	月	消化器病学全国セミナーに出席，JICA事務所訪問。夜学会主催レセプションに出席。
12. 6	火	10：00－11：00，仝セミナーにおいて，映画骨盤内臓全摘術，及び大腸ファイバースコーピーの手技を発表。
12. 7	水	学会での出番がない日。学会側の世話で，跡遺見学に行く予定が，9：00AM出発の約束を10：00迄待っても連絡なし。予定変更して，9日発表の講演原稿作成。同時通訳のために，英文の原稿コピーがあった方が良いとのこと。山本氏（神戸製鋼現地所長）に英文タイプ依頼。
12. 8	木	午前“大腸癌の外科的治療”講演。 一般的に“癌”に対する関心は厚い。比較的若い外科医に反応があるようだ。谷本教授（当地，国立医療センターGeneral Hospital の Gastroenterology の chief ）と昼食，日墨会館。夜は山本氏宅にて夕食に招待。病院見学の足に外傷。
12. 9	金	T・Cが全額，再発行された。City Bank にて受け取る。 人類博物館見学，外傷のため，学会で用意してくれたピラミッド行き止め。午後“大腸癌の早期診断”講演。感染症が多い当地では，早期診断には程遠い感じ。夜は当地2世，医師になりたての宮本一郎君宅に招待された。日本に行って勉強したいとの希望。
12. 10	土	学会がアカプルコ近くの海岸旅行を用意してくれたが，航空券が予定通り届かず，又足の外傷もあって，海岸行きを中止。山本氏の好意で，市内見物，買い物。夜はメキシコ風レストランで夕食（昼食はサントリー）

月　日	曜　日	内　　容
12.11	日	石の宮殿見学，土日に当るので学会，ＪＩＣＡ等には連絡とれない。
12.12	月	早朝ホテルをチェックアウト。９：００ＡＭ発ＰＡ０２１便でロス経由，成田に向う。帰途は平穏無事，約１時間遅れで，成田着。
12.13	火	夕刻４：３０頃成田着，リムジンで箱崎ーがんセンターに帰着。

SOCIEDAD ECUATORIANA DE GASTROENTEROLOGIA

DIRECTIVA:

PRESIDENTE:
DR. CARLOS MORAN VERA

PAST-PRESIDENTE:
DR. JOSE BAQUERIZO MALDONADO

VICE-PRESIDENTE:
DR. MIGUEL ARGUELLO ESPINOZA

SECRETARIO:
DR. TEOFILO LAMA PICO

TESORERO:
DR. HARRY YCAZA CORAL

VOCALES:
DR. ALBERTO NUQUES PARRA
DR. LUIS CAMPODONICO VERNAZA
DR. EDUARDO MURILLO UGARTE
DR. BOLIVAR VILLACIS GALLARDO
DR. EDUARDO DURAN DURAN
DR. NESTOR GOMEZ CUESTA

BIBLIOTECARIO:
DR. MANUEL MARIDUEÑA DEL POZO

DIRECTOR DE PUBLICACIONES:
DR. JOSE GALARZA CORNEJO

Sr. Prof. Dr. Yosio Koyama

Presente

Señor Profesor:

El Directorio de la S.E.G. tiene el alto honor de invitar a Usted para que se digne ser Conferencista en el IV CONGRESO ECUATORIANO DE GASTROENTEROLOGIA, que se realizará en la ciudad de Guayaquil en Junio de 1.985.

Esperando vernos honrado con su asistencia, nos suscribimos de usted.

Muy atentamente,

Por la Sociedad Ecuatoriana de Gastroenterología:

DR. CARLOS MORAN VERA
Presidente

CMV/eca.-

SALA SANTA TERESA, HOSPITAL "LUIS VERNAZA" - TELEFONOS: 303.881 - 361.716 - 390.225
CASILLA: 4039 - GUAYAQUIL - ECUADOR

国　　名　ペルー
指導科目　消化管病理学
派遣先機関　第1回臨床癌ラテンアメリカ会議
　　第8回ペルー癌学会
専門家名　中　村　恭　一
赴任時現職　筑波大学基礎医学系病理教授
派遣期間　1983. 9. 16～9. 23

業務報告書

1　Union Internacional Centra Cancurum（UICC）の主催によるラテンアメリカ地区の癌会議に出席して：

この会議は4年に1回UICCによって開催される世界国際会議と比較して，遜色のないものであった。ペルーの癌学会は，癌の研究面，臨床面において国際的水準に近づくために努力していることがうかがわれる。そのことの傍証として，ペルーの若い医師は講演が終ると質問に来ること，現在ペルー国立癌研究所を新らしく建築していること，などが挙げられる。

講演は「胃癌の組織発生とその臨床病理への応用」と「胃癌の癌発生からの発育経過，特にLINITIS PLASTICA 型癌の発育過程について」である。いづれも，理論とその実際への応用に関することである。

2　ペルーの胃癌の分野に関すること：

ペルー滞在中に，リマ市にあるHOSPITAL "LOAYZA" と HOSPITAL "EDG-ARDO REBAGLIATI MARTINS" とを訪問した。この2つの病院はペルーで一番大きい病院で，HOSPITAL LOAYZA は文部省関係の病院で，その中にUNIVERSI-DAD NACIONAL MAYOR DE SAN MARCOS がある。両者には良い意味での競争がみられ，中堅の医師が一生懸命活躍している。特に，JICAによって日本で勉強した医師が中心になっている。

3　その他：

SAN MARCOS 大学病理学教授（名前は忘れたが，前厚生大臣）と医学教育について話したが，ペルーでは教育機材が十分でないこと，そしてより良い教育を行うためにはその機材の充実をはからねばならぬとの意見である。現在，病理学教育のためにテレビシステムを使用したく，在リマJICA事務所にその援助を申し込んでいる。この教育が充実していないことは，現在筑波大学で開かれているJICAによる消化管病理学研修コースに参加している

ペルーの病理医も主張しているところであり，その援助を実現することは，長い目で見た場合には有効であろうと思われる。

業　務　日　誌

月　日	曜　日	内　容
9.16	金	成田17：30発　RG833
		LIMA 24：00着
9.17	土	学会事務局長 DR. SANCHES宅に招待。
9.18	日	学会開会式
		研究打ち合せ，会食（DR. ESPINOZAら）
9.19	月	JICA LIMA 事務所訪問
		学会出席
		HOSPITAL "LOAYZA" 訪問
		研究打ち合せ会食（DR. CELESTINOら）
9.20	火	学会出席
		HOSPITAL" EDGARDO REBAGLIATI MARTINS"訪問
		日本大使の招待
9.21	水	学会出席
		講演" HISTOGENESIS DEL CANCER GASTRICO"
		講演" CRECIMIENTO DEL CANCER GASTRICO"
9.22	木	LIMA 02：00発　RG832
9.23	金	成田　14：30着。

国　　名　ペルー
指導科目　癌化学療法
派遣先機関　第１回臨床癌ラテンカメリカ会議
　　第８回ペルー癌学会
専門家名　渕　井　　昭
赴任時現職　東北大学抗酸菌病研究所
　　臨床癌化学療法部門教授
派遣期間　１９８３．９．１６～９．２４

業　務　報　告　書

第１回臨床癌ラテン・アメリカ会議および第８回ペルー癌学会出席報告

1　招請講演について

「日本における進行胃癌化学療法の現況」について講演したが，その概要は下記のごとくである。

(1)　１９８２年の日本人死因における癌死，特に胃癌死亡数（死亡率）について述べた。

(2)　過去１４年間において日本で報告された進行胃癌に対する化学療法の成績の解析から本療法の進歩，現状における癌治療上の役割について述べた。

(3)　現在，日本で開発されつつある制癌剤を紹介し，その成績に基づいて，胃癌治療剤の将来を展望した。

(4)　演者が参加した胃癌の化学療法に対する日米共同研究の成績を報告し，進行胃癌化学療法評価の方法論について述べた。

(5)　進行胃癌に対する化学療法効果増強に対する対策の一つとして，演者らが最近開発した昇圧癌化学療法を紹介し，その成績について概説した。

本会議の参加者はＵＩＣＣ関係者を除いては，会議の性格から南米各地からの参加者，特に地元ペルーの参加者が多く，会議登録者は約３００名，正確な数は不明であるが，その他５００名位の参加者があったとみられ，南米における癌研究に対する意欲がうかがわれた。

講演終了後，ペルー，チリ，アルゼンチンの化学療法専門家から質問，文献送付の依頼があり，ある程度の反応があったと思われた。

2　ペルー国の医療，医学の水準について

短期間の滞在のため詳細はよくわからないが，二つの国立病院の訪問，学会出席，医師との話合いを通じ，癌化学療法は，まだ一般に定着しているとはいえない。しかし，胃癌の診断面はかなりの水準に達しつつある印象をうけた。また，一般的には，医療，医学の水準は

低く，特に，感染症対策などが急務と考えられた。

3　その他

今回，ペルーを訪問し，特に感じたことは，わが国に留学し，教育をうけた医師が主として，消化管疾患の診断（内視鏡，病理組織診断）面において活躍していることである。

このことは，わが国における医療，医学面の援助，努力が実を結びつつあることを示しているものであろう。

業　務　日　誌

月　日	曜　日	内　容
9.16	金	第1回臨床癌ラテン・アメリカ会議および第8回ペルー癌学会出席のためRG833便で17時30分成田発23時40分リマ着。
9.17	土	会議ならびに学会事務局長，Dr. Junenal Sanchez（ペルー悪性腫瘍研究所）と会議の内容について打合せ。
9.18	日	会議のopening ceremony 出席 Dr. R. Espinoza，Dr. A. Nago と癌の診断，化学療法について討議。
9.19	月	会議出席 JICAリマ海外事務所訪問。 loayza 病院にて，癌の診断，化学療法について討議。
9.20	火	学会出席 Edgardo Rebagliati Martius 国立病院にてDr. G. Ayala らと癌の診断，化学療法について討議。
9.21	水	学会出席 講演
9.22	木	RG832便で2時00分リマ発
9.23	金	14時10分成田着。

国　　名　ペルー
指導科目　消化器内視鏡学
派遣先機関　第1回臨床癌ラテンアメリカ会議
　　第8回ペルー癌学会
専門家名　小　黒　八七郎
赴任時現職　国立がんセンター病院外来部内科医長
派遣期間　1983. 9. 16～9. 26

業務報告書

1. 機材供与の件

a）東京のJICA経由「カメラ携行についてペルー国税関に問題がないか」との問に対して「問題なし」と回答があったそうだが，ペルー国医師は「gastrocamera」又は「fiberscope」と解釈し，過大の期待を持ち，それでなかったことの失望が極めて大きかった。

b）学会とは無関係の医師より，日本から「特定のファイバースコープ」を1本持参してほしいとの手紙を，出発直前に受けたが，日本から Telex でことわった。上記a）とともに落胆が大きかったようである。「正規ルートを通してほしい」と申入れた。

私としては，リマ空港到着直後にa），b）の両医師から話されて，かなり因感し，弁明した。

c）両スライド本の供与は著しく感謝された。

2. ペルー国の医療協力について

発展途上国に共通と思っているが，日本を含む先進国からの経済，技術援助の期待が大きい。

ペルー国においても，私の専門分野からしてもファイバースコープの供与，ペルー国医師の日本への留学，日本人専門家の現地派遣等が強く要望された。

以上は総論であるが，各論はむつかしい。

a）群雄する医師，多数ある大病院の何れを援助するのか。多少の援助を分散して供与しても「焼石に水」の様であるが，現状でも極めて感謝されている。タイがんセンターの様に一つにしぼったらどうか。

b）日系医師を主とした援助は当国全体の反感を買ってよくない。ブラジルの先例がある。

業　務　日　誌

月　日	曜　日	内　　容
9.16	金	新東京国際空港（NRT）RG833　17：30出発 中村恭一，涌井先生と同行。 23：40　ロス経由でリマ到着。 JICA高木氏，Dr.Sanchez，Dr.Espinoza，Dr.MAKINO 出迎え，Hotel Crillon 着。
9.17	土	午後 Dr.Sanchez とスケジュール打合せ。夜 Dr.Sanchez 宅表敬訪問。
9.18	日	午前 Dr.Nago と学会発表をスペイン語で発表する準備。 午後 Dr.Celestino，Dr.Teresa と Centro medico gastroenteroligia del Peru（San Lucas）視察。 夜，中村，涌井，Dr.Espinosa，Dr.Najo と打合せ。 City hall で opening ceremony 出席（大統領スピーチ）
9.19	月	午前　Hospital "Loyeza" 視察 Director　表敬訪問 Endoscopic Center で内視鏡テレビをみる（Dr.Espinosa etc） 病理　視察（Dr.Takano） JICA訪問，平林所長，高木氏と Dr.Takano の訪日時期，ペルーの医学情勢について相談。 午後　Dr.Espinoza と打合せ。 Congress hall 視察 夜　日本人3名と Dr.Llorenz（チリー）と打合せ。
9.20	火	午前　Dra Teresa etc. と Hospital Empleado 視察 午後　Hotel で学会準備（スペイン語で練習） Dr.Nago 指導 夜　JICA　平林，高木氏と日本大使，野田氏公邸訪問 Dr.Adachi も出席 深夜　ホテルで学会発表のスペイン語練習
9.21	水	午前　同上　　AM9：30よりスペイン語で発表。 午後　Dr.Espicalquis（ブラジルのDr.で現在ペルーにいる）と打合せ 夜　Dr.Adachi 宅訪問
9.22	木	午前　JICA平林氏と Callao 市社保第6病院に行きDr.Burstein

月　日	曜　日	内　　容
		訪問。新築の消化器病棟視察
		午後　Dr. Adachi　宅表敬訪問，Dr. Burstein, Dr. Espinosa と
9. 22	木	打合せ（ホテルで）
		学会 Closing Ceremony 出席。
		夜　Dr. Makino ，Dr. Watanabe と打合せ
9. 23	金	午前　ホテル check out
		午後ＪＩＣＡの車で市内・市外海岸観光
		富田順子氏の眼の病気の件で国立がんセンターを紹介
		（国立名古屋病院を国立がんセンターに変更）
		夜　ＥＡ０１０　２３：５５リマ空港発
9. 24	土	午前　ＭＩＡＭＩで入国出続き
		ＡＭ１１：２０　Ｎ．Ｙ．ＪＦＫ着
		夜　霞朝雄　Dr.と消化器内視鏡の研究打合せ
9. 26	日	１３：３０　NY. JFK　ＪＡＬ００５－Narita
9. 27	月	１６：５０　成田着

購　送　機　材

1. カメラ　　OM-1 etc　9月１７日夜Dr. Sanchez 宅にて供与
（ペルー癌学会宛に）

2. 病理スライド本　1　9月１７日　Dr. Sanchez
2　　２１日　Dr. Takano
3　　２１日　Dr. Llorens （Chili）
4　　２３日　Dr. Burstein（ＪＩＣＡに依頼）
5　学会のため小黒が使用

3　Ｘ線内視鏡スライド本
1　9月１７日　Dr. Espinoza
2　　１７日　Dr. Celestino
3　　１８日　Dr. Nago
4　　２１日　Dr. Ramoz
5　　２２日　Dr. Makino
6　　２４日　Dr. Kasumi　（U. S. A）

国　　名　ペルー
指導科目　神経薬理学，脈管学
派遣先機関　E. R. M国立病院
専門家名　萩　原　彌四郎
赴任時現職　千葉大学医学部脳機能研究施設
　　神経薬理研究部教授
派遣期間　1983. 10. 31～11. 6

業務報告書

1　講演（a・b・cと三つ行なった）

a　The relationship between experimentally induced brain injury and regional cerebral circulation

（ネコの大脳皮質の一部を加温障害し，その領域の血流減少が諸種薬物の前・後投与によって，どのように改善されるかについて，急性・慢性実験を行なった成績についての報告）

対象者：Edgardo Rebagliati Martins 国立病院の神経内科を中心とした研究者約25名，同科主任教授の逐語的通訳，対象者の話の内容の理解度はかなり高く，主として治療面についての質問が5～6。質疑応答は約20分。

b　Methodology in central pharmacology

（主として行動学の面から動物に与えられた薬物の効果を動物の反応形態から人間に与えた場合の効果を類推する方法論）

対象者：San Marcos 国立大学の生化学・栄養学講座の教室員約15名。これは始め学生も対象とするとのことであったが先方の都合により，上記講座の研究者達だけへのセミナーとなった。通訳がなかった事，および対象者の専門領野と話の内容とがややずれていたためか，話の最中には面白い所で笑う等の反応はあったが，質問は一つであった。

c　Brain function and dermal blood flow

（拇指のつけ根の皮膚血流が精神状態に敏感に反応して変化する。たとえばウソ発見器の原理であるGSRより明らかな反応が得られる。これを正常人，精神疾患の患者等について調べたもの）

対象者：Doz de Mayo 国立病院の脳外科を中心とした研究者および医師約40名，若い医局員が通訳したが，それが上手だったらしく，また内容的にも興味深かったらしく一番反応があり，質問もかなりあり，質疑応答は約25分。

2　専門分野について

はじめの現地からの希望ではペルー薬理学会でもセミナーを行う予定になっていた。しか

し時間の関係で用意して行った話をする機会がなかったので，私の専門分野である薬理学がペルーではどのレベルにあるかは判定できなかった。ただ聞くところによると日本の薬理学会のような大規模なものではないらしい。

3　所　感

①　とにかく時間がデタラメで胃の痛む思いがした。たとえばａ講演は１１月２日に行う予定であったが，１１月３日早朝になった，薬理学会への講演はお流れとなった。その他の場合でも通訳の人があらかじめ打合せに来るものと思っていたが，直前まで何の連絡もなかった。

ＪＩＣＡリマ事務所の人達に言わせると，それを気にしていてはラテン・アメリカの人達とはつき合えないのだという。不思議なもので最終日（４日）には私の胃も痛まなくなった。

②　日本人１世から３世位までの人達のペルー国内での活躍は仲々すばらしいものがある。例えばＡ Ｙ. Morisaki 氏はマルチネス病院では院長に次ぐ程の権威がある。このことも含めてペルー国民はかなり親日的であると感じたが，これは「水底を見て来た顔の子鴨かな」的感想であるかも知れない。

③　旅程について

金城旅行者はかなりよく手配してくれたと思う。しかし例えば日程表に書き込まれた時間はアメリカでは１時間ずれていた（冬時間）またリマからニューヨークへ行く途中マイアミ空港に寄り，ここでイミグレイション，バッゲージクレイムがあった。このことは日程表に記載されていない。さらにニューヨークではバッゲージ・クレイムの必要がなかったが，このことも知らなかったので，もしかしてトランクが届かないのではないかと心配し，インフォーメイションで聞いて安心した次第。ただしこのために時間を取られた事と，ニューヨークでの出発時刻が１３：３０でなく１２：３０になっていたため，危うく乗り遅れる所であった。

今後の旅行者に対してはできるだけそのような事のないように注意して欲しい。

業　務　日　誌

月　日	曜　日	内　容
１０.３１	月	１７：２０　成田空港発（ＲＧ８３３） 　９：３０　（現地時間）ロスアンゼルス空港着 １２：３０　（　〃　）　〃　発 ２３：３０　（　〃　）リマ空港着 ＪＩＣＡリマ事務所平林所長，高木氏の出迎えをうけ Hostal Miraflores に投宿

月　日	曜　日	内　　容
11. 1	火	明日の講演につきDr. J. Schilden 氏と打合せ 市内見物後 Hotel E plaga に転宿
11. 2	水	10：30 Edgardo Rebagliati Martins 国立病院に行ったが従業員のストライキのため予定の講演は明朝に延期となる。 Dr. A. Y. Morisaki 氏の案内で病院を見学。日本製の機器が多数使用されていた。
11. 3	木	9：30 E. R. M国立病院・神経内科にてセミナー（45分） " The relationship between experimentally induced brain injury and regional cerebral circulation " 通訳は同科の主任 Dr. Eckenaze 氏，参加者25名位，質疑応答は5～6問約20分 なおこのセミナー終了後 Dr. A. Y. Morisaki 氏から同病院25周年記念のメダルおよび賞状を贈呈された。 11：00 同病院大講堂において大統領以下閣僚出席のもとに記念式典が行なわれ，これに参加。 午後 天野博物館を見学。
11. 4	金	11：00 サン・マルコス国立大学，生化学および栄養学講座（主任 Dr. N. M. Villavicencio 氏）にてセミナー（30分） " Methodology in central pharmacology " 通訳なし，参加者約15名 質問も一つだけ。 12：00 同大学医学部長と会見 学生との話し合いなどあり，極めて多忙の様子であった。 13：00 ドス・デ・メイヨ国立病院・脳外科にてセミナー（45分） " Brain function and dermal blood flow " 通訳は同科主任 Dr. Gongales Portillo 氏 参加者約40名 質疑応答6～7問約25分 14：30 Dr. Gonzales 邸にてカクテルパーティー 20：00 JICA平林・高木両氏により夕食に招待される 23：00 リマ空港
11. 5	土	1：00 リマ空港発（EA010） 6：10 （現地時間）マイアミ空港着 8：50 （　　）　〃　発 11：00 （　　）ニューヨーク・ケネデイ空港着 13：00 （　　）同空港発（JL005）

月　日	曜　日	内　　容
11. 6	日	16：30（日本時間）成田空港着

国　　名　ペルー
指導科目　内科学
派遣先機関　第8回ラテンアメリカ肝臓学会
専門家名　奥田邦雄
赴任時現職　千葉大学医学部内科学教授
派遣期間　1983. 11. 5～11. 13

業務報告書

ペルー国リマ市で開かれた第8回ラテンアメリカ肝臓学会の教育コース（11月7日～9日）および講演会（11月10～12日）に参加。「門脈血行動態の新しい研究方法」，「肝・胆道の超音波診断法」，および「経皮的胆道・胆のう造影法とドレナージ法」の三つの演題で講演を行ない又パネル討議に参加，コースにおいても色々設問，討議を行ない非常に喜ばれた。

南アメリカ諸国は医学の面でかなり遅れており，本会で日本の我々2名以外に米国からIshak博士，ロンドンからWilliams博士が招待されたが，これら4名による講演と討議が最も貢献したように思われる。

ペルーは経済状態悪く，大学病院に消化器診断用のCT断層装置も超音波もなくこのような機械を日本から贈呈すると喜ばれると思った。

業務日誌

月　日	曜　日	内　　容
11. 5	土	ロンドン濃霧のためリアドからの飛行機7時間遅延。ロンドン，マイアミ経由不可能となり，ニューヨークに行き1泊。JICAへTelex送る。
11. 6	日	ニューヨークよりマイアミ経由，真夜リマに到着。JICAより高木さん迎えに来てくれて助かりました。
11. 7	月	参加者教育のため肝臓病理のコースに出席。米国のAFIP（米軍病理研究所）のIshak博士の講演に色々設問，討議をする。
11. 8	火	午前中市内観光。午後学会に出席，コースの中のIshak博士の講演に対し設問，討議。 夕方は前ペルー消化器病学会長の家のパーティーに招待される。
11. 9	水	午前中学会に出席。Ishak博士と討論。昼食を大使館の永合，厚井両氏に招待され，志方君と御馳走になる。夕方市会議場での開会式に日本代表で市長と並び，その後夕饗会に出席。
11. 10	木	10：15AMより「門脈血行動態の検査法」　16：30PMより

月　　日	曜　日	内　　容
11.10	木	「経皮経肝胆管造影法とドレナージ法」　18：30PMより「肝胆疾患の超音波診断」について講演，夕方は会長招宴
11.11	金	早朝帰途につく。

国　　名　ペルー
指導科目　肝疾患
派遣先機関　第８回ラテンアメリカ肝臓学会
専門家名　志　方　俊　夫
赴任時現職　国立予防衛生研究所病理部長
派遣期間　１９８３．１１．３～１１．１４

業　務　報　告　書

今回のリマ訪問の目的はペルーの消化器病学会の肝臓部会（会長 Dr. Rolando Figueroa）が主催する第８回ラテンアメリカ肝臓学会で招待講演をすることにあった。従って対象はペルーだけでなく中南米すべての肝臓病学者であった。又プレコングレスのスライドセミナーで４例の症例を提示して discussion することも求められた。このスライドセミナー用のスライド５０組３００枚（２例はＨＥ染色のみでなくHBS抗原染色のためのオルセイン染色を含む）はあらかじめリマに送ってあった。学会のプログラムの主な部分のコピーを添付する。

Precongress のスライドセミナーでの講演は

Ⅰ Metodologia Diagnostica de la Hepatitis Viral

Ⅱ スライドセミナー

第５例 hepcs simplex hepatitis

第６例 chronic active hepatitis due to HBV

第７例 liver cirrhosis with hepatoma due to HBV

第８例 idiopathic portal hypertention

コングレスでの講演は

Ⅰ Localization del Virus de la Hepatitis Viral en el Hepaticito

Ⅱ Estrategia para la Prevention de la Hepatitis Cirrhosis y Cancer al Higado

又参加したラウンドテーブルディスカッションは

Hepatocarcinoma en Latinamerica Epidemiologica y Marcadores Serologicos

であった。

内容はその表題からわかるようにほとんどすべてが肝炎ウイルスとそれにより引きおこされる肝炎，肝硬変，肝癌の発生機転とその予防の話である。遺伝子工学によるHBVゲノムの癌細胞への組込みの話もその中で行った。

対象はラテンアメリカの肝臓学者約２００名。レベルは日，米，欧の第１線の肝臓学者のレベルよりは若干低い，東南アジアのそれよりはやゝ高い。

プレコングレスの肝臓病理学のスライド・セミナーは常時１００名程度の参加があり，病理標本のよみのみならず，病理発生などについても熱心な討論があった。コングレス中の２回のセミナーと称する特別講演は，より多くの人数が集まったが，討論の時間はなく，あとから，個人的に多くの質問があった。ラウンド・テーブル討論も熱心な討論があったが，全体として言えることは次の通りである

1　知識としては文献を読んでよく知っている。

2　然し実際の遺伝子工学や電顕レベルの酵素抗体法，チンパンジーやマモセットの実験など，実際に自分でやっている人は中南米の科学者にはいない。

3　自分の講演の中でも他人のデータを紹介するだけの部分が多い。従って私自身の話の中にあるデーターを，それはお前自身のデーターか，などという質問が出てくる。

4　一般演題は完全には，わからないが，スライドを見ていると，程度は低い様である。

5　学会の運営に関して司会者も話す方も時間にルーズであり１時間程度のおくれは気にしない様で，ラテン民族の性格があらわれているように思える。

6　米国，日本に留学した経験者も多く，研究者の水準は東南アジア（インドネシア，フィリピンでの感じ）より上である。

7　今回は講演がほとんど毎日で，５回をかぞえ，その他の時間もほとんど講演の準備についやしたため，病院，研究所など見学の時間がなかった。

8　町を見る限り，貧富の差がはげしく，単なる医療協力より，富の再配分或いは有力者の努力をうながす方がよりよいのではないか，という印象をもった。例えば私立の博物館で，インカの財宝や昔の武器を集めたものがあるが，あれだけの資力を病院の建設に使用したら立派な病院がいくつも出来るであろう。国立の癌病院が建設中のまま，たちぐされになっているのと対比して，妙な気持ちになった。

9　日系の医師は２－３指導的な地位にいる人もあるが，若い日系の医師へのテコ入れはペルーに於ける日系人の評価を高めるのに役立つであろう。

業　務　日　誌

月　日	曜　日	内　　容
11. 3	木	１７：４０定刻ＪＡＬ便にて成田を出発 ロス時間　同日１０：０５ほぼ定刻にロス空港に到着 ＪＡＬが予約してくれたCentury Blv のSheraton Plaza Reinaに宿泊。講演のスライドをそろえる。
11. 4	金	パリグＲＧ８３３便 over bookingとのことでイースタン航空ＥＡ８４にてマイアミに行きＥＡ１便にてリマに向う。 ロスよりリマのＪＩＣＡ事務所に航空機変更の事をパリグから電話で連

月　日	曜　日	内　　容
		絡してもらう。ＥＡ８４便は予定通りマイアミに到着する。ＥＡ１便は１１月５日午前１時出発の予定が１時間以上おくれる。
１１．５	土	ＥＡ１便のおくれは，キューバがアメリカの航空機の上空の通過を拒否した為と機内説明があり，航路はキューバをさけ，パナマの空港に一時着陸の上ペルーのリマに向う。その為リマ空港到着は３時間遅れ，朝１０時頃となる，ＪＩＣＡのリマ事務所の高木さんとDr．Takanoが空港にむかえにきてくれる。 リマ，シェラトンホテルに入り休養と講演の準備を行う。
１１．６	日	午後Dr．Takanoがリマの町，Museumなどの案内をしてくれる。 時差ボケが相当強い。
１１．７	月	第８回ラテンアメリカ肝臓学会のプレコングレスの肝臓病の病理標本のスライドセミナーが７日，８日，９日の予定で始まる。 ７日は８時３０分から１１時２０分迄，アメリカのＡＦＩＰのDr．Ishakが４例の症例と提示，討論を行う。 １１時４５分から，１２時３０分迄，ウィルス性肝炎の組織診断"Metodologia Diagnostica de la hepatitis viral"と題して講演を行う。聴衆は約１００名，講演は英語で話し，それをスペイン語に通訳するという方法で行ったが，討論は極めて活発であった。殊に免疫組織学的染色ウィルスDNAの組込みなどの話しに対しての質問が多くあった。 午後は，８日のスライドセミナーの準備についやす。
１１．８	火	７日のDr．Ishakの方法と同様に８時３０分より１１時１０分迄，４例の症例の提示と討論を行う。症例は第５例（第１例から第４例迄は７日にDr．Ishakが提示）がヘルペス肝炎，第６例がＢ型の慢性肝炎，第７例がＢ型肝炎ウィルスに関連した肝硬変と肝細胞癌，第８例が特発性門脈圧亢進症，聴衆は約１００名，討論は活発で特にＢ型肝炎ウィルスと肝細胞癌の問題に質問が多かった。聴衆の知識は比較的ゆたかであるが，自分で新しい領域の仕事をしている人はいない。
１１．９	水	スライドセミナーはスペインのDr．Bullonにより行われる。 夜の７時半より，リマの市会堂で第８回ラテンアメリカ肝臓学会の開会式がある。開会式のあとカクテル・パーティー。
１１．１０	木	学会が始まり，１３時すぎから３０分特別講演を行う。表題は肝炎ウィルスの肝組織内局在"Localization del virus de la hepatitis viral en el hepatico"

月　日	曜　日	内　　容
		予定の時間は１２時から３０分の予定であったが，約１時間，時間がずれる。聴衆は約２００，討論はなし。英語，スペイン語の同時通訳。一般講演はスペイン語のためよくわからないがやはり程度は低いようである。
１１.１１	金	学会の中で午後４時１０分から６時迄肝細胞癌のラウンドテーブル討論に参加。ウィルスDNAのintegrotion の話が出来るのは日本だけだった。ラテンアメリカの学者は他人のデーターをまとめて話す人が多く，自分自身のデーターの不足が目立った。 チリは肝硬変が多いがアルコール性のもので，肝細胞癌は，４０％しか肝硬変を伴っていないという。本当にそうなのかどうか問題あり。
１１.１２	土	９時半から１０時迄　特別講演，肝硬変，肝癌予防の戦略 Estrategia para la prevenient de la hepatitis cirrhosis y cancer al hi gado を行う。垂直感染の予防の話はラテンアメリカの肝臓学者にとっては，はじめての話題である。 １２時から閉会式があり，表彰状をもらう。 ９時３０分ＪＩＣＡリマ事務所の高木さんに空港に送ってもらう。 アルゼンチン航空　３８４便に乗る。　夜１２時発。
１１.１３	日	朝７時ロス着 ＪＡＬ６１便　１２時発に乗る。
１１.１４	月	日本時間５時　成田到着。

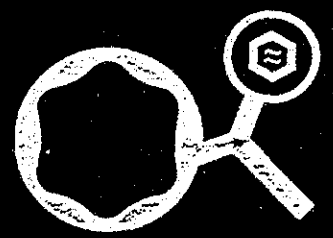
"VIII JORNADAS LATINOAMERICANAS DE HEPATOLOGIA"

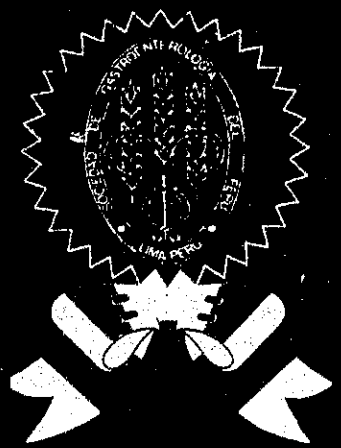
"I CONGRESO NACIONAL DE HEPATOLOGIA"

CENTRO CIVICO I.P.S.S.

7 AL 12 DE NOVIEMBRE, 1983

LIMA – PERU





MSD
MERCK
SHARP
DOHME

VIII JORNADAS LATINOAMERICANAS DE HEPATOLOGIA

7 - 12 NOVIEMBRE 1983
CENTRO CIVICO - IP.S.S. - LIMA - PERU

CRONOGRAMA DE ACTIVIDADES

HORAS	DOMINGO 6	LUNES 7	MARTES 8	MIERCOLES 9	JUEVES 10	VIERNES 11	SABADO 12
08.00	INSCRIPCIONES	CURSO INTERNACIONAL: 1-A SEMINARIO DE LAMINAS 1-B MARCADORES SEROLOGICOS EN HEPATITIS VIRAL			CONFERENCIAS		
09.00					TRABAJOS LIBRES		CONFERENCIAS
10.00					MESAS REDONDAS		
11.00							
12.00					CONFERENCIAS		CLAUSURA
13.00					SESION - ALMUERZO		
14.00							
15.00		CURSO INTERNACIONAL: 1.B AVANCES EN HEPATOLOGIA 2.B EL LABORATORIO EN HEPATOPATIAS			TRABAJOS LIBRES		
16.00					MESAS REDONDAS		
17.00							
18.00					CONFERENCIAS		
19.00							
20.00							

"VIII JORNADAS LATINOAMERICANAS DE HEPATOLOGIA"

PRESIDENTE HONORARIO:

—*Arquitecto Fernando Belaúnde Terry*
Presidente Constitucional de la República

VICE-PRESIDENTE HONORARIO:

—*Dr. Juan Franco Ponce*
Ministro de Salud

MIEMBROS HONORARIOS:

—*Arquitecto Eduardo Orrego Villacorta*
Alcalde de la Ciudad de Lima

—*Dr. Gastón Pons Muzzo*
Rector de la Universidad Nacional Mayor de San Marcos

—*Dr. Orestes Rodriguez Campos*
Rector de la Universidad Nacional "Federico Villarreal"

—*Dr. Homero Silva Díaz*
Rector de la Universidad Peruana "Cayetano Heredia"

—*Dr. José A. Barsallo Burga*
Decano del Colegio Médico del Perú

—*Dr. Andrés Darg Barbieri*
Presidente del Consejo Regional III del Colegio Médico del Perú

PROFESORES INVITADOS

ESPAÑA:

—Dr. AGUSTIN BULLON
Profesor de Patología
Universidad de Salamanca

ESTADOS UNIDOS DE AMERICA:

—Dr. KAMAL ISHAK
Profesor de Patología
Armed Forces Institute of Pathology
Washington

—Dr. RAUL PEREIRAS,
Profesor de Radiología
Universidad de Miami, Florida

—Dra. MARIA HINOSTROZA SJOGREN
Departamento de Virología
Walter Reed Army Institute of Research
Washington

INGLATERRA:

—Dr. ROGER WILLIAMS
Director del Servicio de Hepatología
King's College Hospital Medical School
Universidad de Londres

JAPON:

—Dr. KUNIO OKUDA
Director del Primer Departamento de Medicina
Profesor de Medicina
Universidad de Chiba – Japón

—Dr. TOSHIO SHIKATA
Director del Departamento de Patología
Instituto Nacional de Salud – Tokyo
Profesor de Patología
Universidad de Nihon – Tokyo – Japón

CURSOS INTERNACIONALES

Del 7 al 9 de Noviembre 1983

CURSO I. - "AVANCES EN HEPATOLOGIA"
I.A. "SEMINARIO DE LAMINAS"

Coordinador : Dr. Juan Takano M.

Local : SALA 1 y 2
Fecha : 7, 8 y 9 de Noviembre
Hora : 8.30 a 13.00 hrs.

Lunes 7 de Noviembre

Presidente: Dr. Ramón Purón
Secretario: Dr. Pedro Chacón Y.

08.30 a 08.40 hrs. Introducción y Objetivos
Dr. Juan Takano (Perú)
08.40 a 09.20 hrs. Primer Caso
Dr. Kamal Ishak (U.S.A.)
09.20 a 10.00 hrs. Segundo Caso
Dr. Kamal Ishak (U.S.A.)
10.00 a 10.40 hrs. Tercer Caso
Dr. Kamal Ishak (U.S.A.)
10.40 a 11.20 hrs. Cuarto Caso
Dr. Kamal Ishak (U.S.A.)
11.20 a 11.45 hrs. Intermedio
11.45 a 12.30 hrs. CONFERENCIA:
"Metodología Diagnóstica de la Hepatitis Viral"
Dr. Toshio Shikata (Japón)

Martes 8 de Noviembre

Presidente: Dr. Sixto Recavarren
Secretario: Dr. César Salinas

08.30 a 09.10 hrs. Quinto Caso
Dr. Toshio Shikata (Japón)
09.10 a 09.50 hrs. Sexto Caso
Dr. Toshio Shikata (Japón)
09.50 a 10.30 hrs. Sétimo Caso
Dr. Toshio Shikata (Japón)
10.30 a 11.10 hrs. Octavo Caso
Dr. Toshio Shikata (Japón)
11.10 a 11.45 hrs. Intermedio
~~Dr. Toshio Shikata (Japón)~~
11.45 a 12.30 hrs. CONFERENCIA:
"Hepatología Alcohólica"
Dr. Augustín Bullón (España)

Miércoles 9 de Noviembre

Presidente: Dr. Juan Takano
Secretario: Dr. Pedro Chacón Yupanqui

08.30 a 09.10 hrs. Noveno Caso
Dr. Augustín Bullón (España)
09.10 a 09.50 hrs. Décimo Caso
Dr. Augustín Bullón (España)
09.50 a 10.30 hrs. Décimo Primer Caso
Dr. Augustín Bullón (España)
10.30 a 11.10 hrs. Décimo Segundo Caso
Dr. Augustín Bullón (España)
11.10 a 11.30 hrs. Intermedio
11.30 a 12.30 hrs. CONFERENCIA:
"Injuria Hepática Inducida por Drogas"
Dr. Kamal Ishak (U.S.A.)
12.30 a 13.00 hrs Clausura del Curso
Dr. Juan Takano Morón (Perú)

CONFERENCIAS

Jueves 10 de Noviembre

Local: Auditorium del Centro Cívico

Presidente: Dr. Germán Garrido Klinge
Secretario: Dr. Luiz Peña

08.00 a 08.30 hrs. Secreción Biliar: Nuevos Conceptos y Proyección Clínica
Dr. José M. Orellana (Chile)

08.30 a 09.00 hrs. Enfermedad Fibropoliquística del Hígado
Dr. Kamal Ishak (U.S.A.)

Presidente: Dr. Alberto Ramírez Ramos
Secretario: Dr. Luis Ayala E.

12.00 a 12.30 hrs. Localización del Virus de la Hepatitis Viral en el Hepatocito
Dr. Toshio Shikata (Japón)

12.30 a 13.00 hrs. Patogénesis y Tratamiento de la Hepatitis Crónica
Dr. Roger Williams (Inglaterra)

Presidente: Dr. Ernesto Castillo Lindley
Secretario: Dr. Raúl Llosa

18.00 a 18.30 hrs. Radiología Intervencionista en Patología Hepatobiliar
Dr. Raúl Pereira (U.S.A.)

18.30 a 19.00 hrs. Ultrasonografía en Enfermedades Hepatobiliares
Dr. Kunio Okuda (Japón)

Viernes 11 de Noviembre

Local: Auditorium del Centro Cívico

Presidente: Dr. Raúl León Barúa
Secretario: Dr. César Soriano

08.30 a 08.30 hrs. La Agresión Viral a la Célula Hepática. Antígeno Delta
Dr. Oscar Fay (Argentina)

08.30 a 09.00 hrs. Factores Etiológicos en la Evolución de la Hepatitis Viral Aguda
Dra. Marta Velasco (Chile)

Presidente: Dr. Max Biber
Secretario: Dr. Guillermo Pino del Pozo

12.00 a 12.30 hrs. Hepatitis Crónica Activa Asintomática
Dr. Simón Beker (Venezuela)

12.30 a 13.00 hrs. Derivación Peritoneo-Yugular en el Tratamiento de Ascitis
Sr. Silvano Raia (Brasil)

Presidente: Dr. Rodrigo Ubilluz
Secretario: Dra. Teresa Castillo

18.00 a 18.30 hrs. Enfermedades Metabólicas Hereditarias que afectan al Hígado
Dr. Kamal Ishak (U.S.A.)

18.30 a 19.00 hrs. Transplante Hepático
Dr. Roger Williams (Inglaterra)

Sábado 12 de Noviembre

Presidente: Dr. Hernán Espejo R.
Secretario: Dr. Carlos Guillén

09.00 a 09.30 hrs. Estado Actual del empleo de Fármacos Hepatoprotectores
Dr. Guillermo Ugarte (Chile)

09.30 a 10.00 hrs. Estrategia para la Prevención de la Hepatitis, Cirrosis y Cáncer al Hígado
Dr. Toshio Shikata (Japón)

10.45 a 11.00 hrs. Sistemas de Hígado Artificial
Dr. Roger Williams (Inglaterra)
11.00 a 11.50 hrs. MESA REDONDA
Otros Panelistas:
Dr. Kamal Ishak (U.S.A.)
Dr. Alfredo Marten O. (Costa Rica)

SALA 6 **MESA REDONDA No. 6**

"PARASITOSIS HEPATO BILIAR"

MODERADOR: —Dr. Simón Beker (Venezuela)
COORDINADOR: —Dr. César Naquira (Perú)

10.10 a 10.15 hrs. Introducción
Dr. Simón Beker (Venezuela)
10.15 a 10.30 hrs. Amebiásis
Dr. Raúl Olaeta Elizalde (Méjico)
10.30 a 10.45 hrs. Hidatidosis
Dr. Eduardo Guarnera (Argentina)
10.45 a 11.00 hrs. Fasciolasis
Dr. Hugo Lumbreras (Perú)
11.00 a 11.15 hrs. Esquistosomiasis
Dr. Luiz Caetano Da Silva (Brasil)
11.00 a 11.50 hrs. MESA REDONDA
Otros Panelistas:
Dr. Fernando Patiño (Bolivia)
Dr. Hernán Reyes (Chile)

Viernes 11 de Noviembre
16.10 a 18.00 hrs.
Salas 1 y 2; y 6

SALA "A" **MESA REDONDA No. 7**

"CIRROSIS HEPATICA. CLASIFICACION Y PREVALENCIA EN LATINOAMERICA"

MODERADOR: —Dr. Guillermo Ugarte (Chile)
COORDINADOR: —Dr. Jorge Berrios (Perú)

16.10 a 16.15 hrs. Introducción
Dr. Guillermo Ugarte (Chile)
16.15 a 16.30 hrs. Clasificación Anatomopatológica
Dr. Sixto Recavarren (Perú)
16.30 a 16.45 hrs. Clasificación Clínica
Dr. Luiz Caetano Da Silva (Brasil)
16.45 a 17.00 hrs. Aspectos Laparoscópicos
Dr. Arturo Jorge (Argentina)
17.00 a 17.50 hrs. MESA REDONDA
Otros Panelistas:
Dr. Augustín Bullón (España)
Dr. Alfredo Marten Obando (Costa Rica)
Dr. Miguel Garassini (Venzuela)

SALA 6 **MESA REDONDA No. 8**

"HEPATOCARCINOMA EN LATINOAMERICA: EPIDEMIOLOGIA Y MARCADORES SEROLOGICOS"

MODERADOR: —Dr. Jorge Findor (Argentina)
COORDINADOR: —Dr. Ricardo Ruiz (Perú)

16.10 a 16.15 hrs. Introducción
Dr. Jorge Findor (Argentina)
16.15 a 16.30 hrs. Epidemiología
Dr. Luiz Da Costa Gayotto (Brasil)

16.30 a 16.45 hrs. Virus B y Hepatocarcinoma
Dra. Marta Velasco (Chile)
16.45 a 17.00 hrs. Alfafeto Proteina
Dra. Estela Bruch (Argentina)
17.00 a 17.15 hrs. Hepatoma: Nuevas investigaciones
Dr. Roger Williams (Inglaterra)
17.00 a 17.50 hrs. MESA REDONDA
Otros Panelistas:
Dr. Kamal Ishak (U.S.A.)
Dr. Toshio Shikata (Japón)
Dr. Gerardo Garrido P. (Perú)

Sábado 12 de Noviembre
10.00 a 12.00 hrs.
Salas 1 y 2; y 5

SALA "A" **MESA REDONDA No. 9**

"HEPATOPATIA POR DROGAS"

MODERADOR: —Dr. Victor Pérez (Argentina)
COORDINADOR: —Dr. Benjamin Alhalel (Perú)

10.10 a 10.15 hrs. Introducción
Dr. Victor Pérez (Argentina)
10.15 a 10.30 hrs. Detoxificación
Dr. Ivo Sapunar (Chile)
10.30 a 10.45 hrs. Anatomía Patológica
Dr. Kamal Ishak (U.S.A.)
10.45 a 11.00 hrs. Clínica y Tratamiento
Dr. Roger Williams (Inglaterra)
11.00 a 11.50 hrs. MESA REDONDA
Otros Panelistas.
Dr. Simón Beker (Venezuela)
Dr. Ricardo Katz (Chile)
Dr. Alfredo Chahud (Perú)

SALA "B" **MESA REDONDA No. 10**

"HIGADO Y ALCOHOL"

MODERADOR: —Dr. Luiz Caetano Da Silva (Brasil)
COORDINADOR: —Dr. Carlos Ramos (Perú)

10.10 a 10.15 hrs. Introducción
Dr. Luiz Caetano Da Silva (Brasil)
10.15 a 10.30 hrs. Anatomía Patológica
Dr. Augustín Bullón (España)
10.30 a 10.45 hrs. Patogénesis
Dr. Guillermo Ugarte (Chile)
10.45 a 11.00 hrs. Hepatitis Alcohólica
Dr. Jorge Findor (Argentina)
11.00 a 11.50 hrs. MESA REDONDA
Otros Panelistas:
Dr. Carlos Golindano (Venezuela)
Dr. Fernando Patiño (Bolivia)
Dr. Juan Gutiérrez M. (Perú)

SESION ALMUERZO

Jueves 10 de Noviembre
13.30 a 14.30 hrs.

COMEDOR "A"

—Tema : **"Hepatitis Crónica"**
—Profesores Invitados : —Dra. Marta Velasco
—Dr. Jorge Findor
—Dr. Kamal Ishak

COMEDOR "B"

—Tema : **"Ascitis"**
—Profesores Invitados : —Dr. Hugo Tanno
—Dr. Guillermo Ugarte
—Dr. Alfredo Marten

COMEDOR "C"

—Tema : **"Profilaxis de la Hepatitis Viral"**
—Profesores Invitados : —Dr. Victor Pérez
—Dr. Victor Villarejos

COMEDOR "D"

—Tema : **"Hipertensión Portal"**
—Profesores Invitados : —Dr. Silvano Raia
—Dr. Arturo Jorge
-Dr. Roger Williams

Viernes 11 de Noviembre
13.30 a 14.30 hrs.

COMEDOR "A"

—Tema **"Hepatitis Viral Aguda"**
—Profesores Invitados —Dra. María Hinostroza-Sjorgen
—Dr. Toshio Shikata
—Dr. Ricardo Katz

COMEDOR "B"

—Tema : **"Síndrome Hepato Renal"**
—Profesores Invitados : —Dr. Roger Williams
—Dr. Carlos Golindano
—Dr. Guillermo Ugarte

COMEDOR "C"

—Tema : **"Parasitosis Hepato Biliar"**
—Profesores Invitados : —Dr. Hugo Lumbreras
—Dr. Eduardo Guarnera
—Dr. Raúl Olaeta Elizalde

COMEDOR "D"

—Tema : **"Drenaje Biliar"**
—Profesores Invitados : —Dr. Kunio Okuda
—Dr. Raúl Pereiras
—Dr. Arturo Jorge

Los Tickets se podrán adquirir en la Secretaría.
Valor: 10,000 soles.